世一
齊陽
連
文化八
聽雨窓

芭蕉袖草紙下

浪速　花屋蕃商淵按

元禄四年

[illegible]

[illegible]日

大津孫の子めとりそいに仕

猿蓑　芭蕉

[illegible]

梅の葉まりこの宵はとろけ　乙孤

[illegible]

雲雀鳴小田よりとぶ鳥や　琢磨

[illegible]

行[illegible]る生[illegible]　素男

[illegible]　孤

二ヶの客いたく生たる秋　麦
故やる鶏の紙いとゝも世話　男
稲の葉のひの力ふ花風　碩
麦ムのうゝめに載る後藤辺　蕉
内蕊花のうとゝ生てゑいたれ　孤
和の刻の箕のまゝ鳴小西方　碩
ゝゝ花る故のきけゝゝ　男
萩の孔ゝ花の孔を係引て　加
雀うゝゝる百こゝゝ一声　智居
懐ゝ花あゝむる秋の力　凡兆
汐ゝゝゝぬ外の海つゝ　加
陰の柄ゝ立ゝをうゝ荒響　去来
灰ゝ花ゝ花ゝ茶の海　兆
芸の日ゝ注番て帰る往机　正秀

庶左もの養ゝ供のゝ弱ゝ　来
汗ぬゝ花ゝ湯の志ゝしの絆の糸　半残
ゝゝ花せゝし花雑の下　士芳
大膳ゝ四ひくゝゝを改ゝをして　残
分ゝぬ生紙のゝゝふゝき　芳
小刀の蛤ゝふる細工ゝ　残
机ゝ火ゝゝ花ゝ大年のお　園風
ゝゝゝゝゝ思ゝ花ゝゝ浦　猿雖
胸ゝゝゝゝゝゝ世ゝゝ肩衣　残
ゝ夏ゝゝ花ゝ城ゝる彼花　風
芳油ゝゝゝゝて志ゝ力ゝる　雖
嘆声の隣ゝゝゝ花ゝゝ芳
涙ゝゝゝゝゝゝゝ花ゝ　風
取ゝき後ゝゝゝゝゝ金洋金　嵐蘭

[illegible]ろ井の刈下弦　史邦
花よりとしはれも定らん　野水
雛の扶持そむるとしる風　羽紅

山里は万葉ちらしうめの花
うぐいすのふる雨や二葉の茄子　前
芝風よこうとふ舟の苔の底　萩子
ふ性とやかき出さんし茶箱

重潰

ふ性の字信の情緒の匂ひ
[illegible]
刈去ば迅紅の人をとゝ
ふ紅大竹糸をもる角茶
[illegible]

蕉杖舎　二百

柚の花よむ[illegible]ば[illegible]料理の方
五月雨やを[illegible]へけるを[illegible]

猿蓑　九兆

市中は物のふはひ[illegible]方
あつしとて門しめてこもる　芭蕉
二書州[illegible]深[illegible]穂に出て　去来
灰うちたく[illegible]うるめ[illegible]　兆
心筋い根も[illegible]不自由さよ　蕉
[illegible]ひやしに[illegible]脇　来
草むら小蛙[illegible]ふる夕雲　兆
蕉の葉[illegible]る行燈[illegible]清　蕉
[illegible]のむらい花の[illegible]時　来

能しゐの七尾の冬い住うれ　北
奥は背志りるまて先をそて　蕉
まれ人入しゝ小町門の後　来
立こうり屏風をたふす女子共　北
湯屋ハ井の養の子俺一紀　蕉
茴香の実ハ成ふ高とクあ　来
僧や〻寒く寺よ泊るか　北
猿蓑のさると笑ふ秋の月　蕉
年に一斗の地ふるとて　来
五六戸一まてはけうる水酒り　北
足袋ふそとよそ紀はっれ　蕉
追たてるよ紀御馬の力　来
洞市う為人あるうたら　北
戸陰ふもむーろかと紀の妻屋表　蕉

てんとやまうはもういつうを付　来
こそしと草鞋成他ふ方ぬさ　北
登城ふるひよ紀一秋　桂
その中に物ひ落ふ外ふと　来
ゆうて蓋の合ぬ寸　北
草庵よ志ゝく屋て赤ゆう　蕉
いのち蛙一紀探集の汐法　来
ふ屋しよ品帯ふる城て　北
うを世のそていハ〻ぬ小町く　蕉
汁ものよ粥そ〻ふも後人を　来
御沼ちとふれい庵を扱茂　北
まれひ〻小虱迄ふる花の法　蕉
蔦動う為屋のねひ〻を　来
刀奈表山

素うろれ式とけ出て瓜の異か　去来
世拙よ蟬の吟をつろて　浪化
歩り葛ちよ扇ふうい人と咲て　芭蕉
かとしは供のるとさる　之道
十時ほと夜のかうなる月入　丈州
火のもちくしと燃てやゝ冬　支考
軒にい蔦迄のほる音請　惟然
見者ともうえをあうむる　野童
切り立て畑えて夜ひ仙　野明
そろしを生をそれうち　来
寄ゝ合い鎌の元色ぬ沙法斗り　道
ひくう嫁けーれ焼のさや　州
ちくしは風若者みしたれ　者
ちそ　しとそちい春のあ　然

砂川の沙く流るゝ夕月　童
寒さとれしも淫為ふつく　明
百ほろ〳〵花の本陰ぬ　道
菜種おほろよ西城ん晴ん　来
仏午小撈厳ふ　草
扨傷の云奉ぬ　考
朝の内ひをこに馬城退せや　然
條ほさあけて汁粉も等　童
羽ふ板の寄て一方にあ初　明
僧上ふ入て妻ぬる　道
案小設よ結の十徳のを分ふと　来
ほ転ふりさと秋ハ来ぬ　草
世夕ア月城世よ取山よ　考
寄ゝふ畠の吟ふかつく　然

雨降れば神の戻りのうれしと　童

うち出るうる市の小屋掛け　明

はこころの化粧箱ちらつかせて　道

舞と囃のふかる　扶持考

市屋の郷下りして洞くみ　艸

塗と箱うり市の出一入　蕉

花の香のたうしくやはぬ　然

日こうの一日ちのさへぬ　明

俳諧集

年ちをうるうるに拾ひて
さら家ん弘法を

ひうしとあうる屋やうれ除　芭蕉

青葉ほちぬ法く夕立の　安世

涼弘法ん弘法名残よ送て　支考

ゑれ立て家弘造る原中　宰蕉

有の紙をめうれ拾ひ集て　土龍

大うと虫のよ弘法そうへおく　丹埜

傘弘をほめて戻ろう弘の蓋　芽

宝ううるる人の玄　伴蕉

さうけうと拾弘をうへ連ぬ　世

拾ひ物やうしう海除　考

ゑうれに弘法付るおまして　野

志向の風よ新と吹ろく　芽

ようく把るむをこの居る線上　蕉

ろうくに戸の美引はまう　路通

ま一つてひとひうふれ思も変を

ちつとの事よ枝前うたく

有花弘礼のえかーうう

あうう雑ろうしや描うり　野

石塔弘元よりて今朝を出ん
背丈ケ伸たる牌きゝかな
古久め人形仲宵う寄てふる菊
立端出してこういかう
絢帯小袖をきみて宿の
名残の町の迫付もるる
明方の燈まだてたる実赤果稲　業文
ことしはいろう浸るあらむ
菅薄いろつまると詩の秋雪
いつ紙りてもいつ待い上まあり
女房まだく笑られぬ笑情して
屋これ武士の二番とくも
土手節の茶竹小枝小切たる　野
四の茶時まとやる富士垢離

下六

坂の居れたるもれてふいの方
酒しほと名残付て呑る
病ぬいて結白まあるる花笠
ともくへ向くもそいらんろう
俳諧集
秋立て二丁凡うれ雨乳ふ　及角
茶居ふゃえて名残るとか　珠碩
早稲茶茶筅を仕出用も　之道
人ちーを考るし辻の殿下作　正秀
脂柳もさひーくえ西る田舎猿
をうつふれーけろの風　探志
番揺て紅のこけらを拾て人　碩
ちえ丈の髪もたいよ　す道
居ふ雑炊時の中る乳房

雷おちる娘こうあゆれ　秀
かけて玉く合羽の系ぶ止れ　道
肌をくと博奕うち　負る　硯
力の蒸酒よせいし紀近うえ　秀
茶筑蔚なうと寺の雇人　志
上張よ弱ぬをむ臼のうけ　房
目和よむ紀一　蒸の朝明　肩
どりしと掠板ぬう人花笠　硯
蒸のひつれたの主の刈草　道
幅度よ砂川うちる雨さよ　志
羽織をろゆる講蒸うと　肩
行うて朝起ある立六日　道
茶筑休む塗　西の味　芭蕉
毋親の仕立てんとる嫁入り衣　秀

下ノ七

急よさ一出る因祖ふし　房
江戸店とおて生涯の門つま　硯
麦筑莫る番よ咽のうきし　道
股引の方筑要にせられて　志
青の小函に若井生出る　肩
志んしと国の伊与屋月　秀
うろ筑にる秋のひよる　肩
ふ畠の木行うをつく風の青　蕉
石地の板とうつるや坊　硯
情張を亀井の大立彫して　道
かうと紀を筑を奈良の潛上　肩
野の度さ辛し花を極ひろ　秀
かうしとうる蒸のあけはの　硯

俳諧集

蠅ふらふらとやうやう秋の日数れ　去来

蔓のうち吹性子の皺　芭蕉

小灯をさいぬぬ蔡よかけ格て　路通

初して来る奥の腰丈竹

一通りえられる墨る朝月よ　惟然

たくさくと脊中おそる　来

歩あけて云ふ生ぬ人と思ひ　蕉

よれはうひよる出る面うけ　通

おはしのそれかうて色れ　草

光そろへたる芝のふされ　然

夕ゆ蓋させる蔭して立すう　来

泥うちうれ早乙女のされ　蕉

石備いつれ欠ぬふうりう　通

牛は背よて牛他ちまや　草

酒の酒かて上ケて酔ふせう　然

宝の八島はたつ奪ひつ　来

陸奥い花ようなのさはしふ　蕉

竪の糸仙をるこちの雪　通

解ぬの友をはかる去れ雨　草

我小力よ志むる巻　菓　然

おはい産そと宝に敷出て　来

涛してとる沈の安さよ　蕉

行出ちく拾ひ沈手の古竹履　通

あを似人と雲よ帰る　草

供ちく法主しも雪れ静さ　然

烟の中よ蔭る　稲　よ　来

人法主井よ無退ち多方抜　蕉

拡ろ類正の文えぬ武けさ　通

やせしけふはおもかげ数へそめ　草
御簾のかげにかくしぬ侍　然
子規ありし鳴て通りけり　木
けふりの中に下をこそや摘　蕉
此鳴も行脚斗りまそろひ　通
会芸はとく蓑笠のうへ　草
佛よいからとの花は奉る　然
菜はほむ髪の白れ晒　来

星合集

斗部屋は坂の夢ふし秋の風　芭蕉
下樋の上に蒲萄たなほろ　路通
酒志ほる宗なりにけられて　史邦
鹿肥みれ出おかりきり　丈草
夕れ井に筆出しるるとみ床　去来

蓮のすさ葉の露かゝるに　野童
ウ 笈招もすこ新らしくそつれて　正秀
ほとりの楽はねむきとさ　蕉
体を日も瘧ふるひの敵よいく　通
凄くむ臭の儀いふせよ　邦
ふま干なる裏打紙張見　草
いつも露ともり萩の下枝　来
秋立て又一志きり茄子汁　童
芦縁とく備堂の月　秀
かふれかは出ると筆れおれ　蕉
痛よ濃しまて浮世さりけり　通
発るしきにふらねいおぬ花のさ　邦
畑ふするきそ苦しき　筆
十 人ん屋寺は岡いさえつて　来

産月まで　もうろき　仏　童
う紀事紋過井上伝る陸奥　秀
絢　買　客のこうる衣し　蕉
硝子よ減り除えもる茶酒　通
橋　咲いむうし　法　ふし　邦
叢　の　蘇ふう　ものり　所僧　草
明石の　塀の　太鼓　出次　童
大うこいにーやうる　紅ものし　秀
ちうこれ　似せめ　蝶こひふれ　通
ものされて　女の　中れ　青紙う　義
義ゑられぬ　志のひ　法の　方　通
匂ひ　水ものう　るくるる　初　花　邦
ものも　鼬のこう　ら　遅ひ　出を　草
ものて　おーお　えも　ふ　ものかーと　来

油あけをぬ庭ふやせたり　童
篤の花よい庭ーとうふて　秀
柳を風のたをけをそ吹　秋華

庭石銘　人の絵をよこれれ
ものいへい庭宝ーし秋の風　ものしをとこれれ
いふつうてさうねんの雲さる

猿蓑

九九

原汁補の京やうやうしを
あうーかとうて青蘇をふ秋　芭蕉
新蕎麦あのしたる方氣　野水
なーつく蛙十のさうつ紀　去来
千代竹一あ紋さるしてて　蕉

うくひすの青き柳をふる　兆
雪の出て肱よわやる春れ物　来
屋敷みる根よりそれる水
夕飯よかまをとこ食へ風雪　兆
蛭の口愛をうれて幸味れ　蕉
物思ひ入ることれて休む日よ　水
色せそ〜れ藏うの物ミ　来
金鶏と人よ呼ぶ多れやをさ　蕉
ちの丸岩はきの青しの有　兆
町内の秋もふけ物やれ　来
行とえるるこ家そうく　水
花ともる身ハ西ゆう衣岩テ　蕉
木蓄の酢茎小ミる言つ　兆
う一ゑ中ら山陰たとえ十か　水

紫さを家の株とかけ　来
冬至の荒ふるたる小ろ　兆
旅の独寝よ有内おく　蕉
をさまき女の翁をもそう先て　来
おるおひ牛根のるく　水
中人有扶家の童根の用勢　蕉
人もこそれ〜ならそ〜の水　兆
うそ住をに自腹を芋人　水
まこと大事の新ととり等　来
悟より因れ青中紅ていさ紅　兆
加茂の社ハよ紅ちゝる　蕉
あうりの屋声ろ名柔れて　来
雨のやうりの安居迅速　水
屋行る古跡れ多のたうとさよ　蕉

志ろがねし水は蘭のそらん　兆
糸桜腹一くんそ咲にけり　素
芝はえ月曜のそら　水

夕顔歌

古寺荒月　芭蕉

月こんとろ庭よりつくし紅葉し
庭の梯の葉ゝの虫とふれ　尚白
火捕ぬる窗の影(イニの名ホーヒ)とゆびめて、
別商陸の古れ枝　杉茶　蕉
尾張のめてたうる桂小舟、
百家しめる川の水　上　白
寂寞と糸る人ふき菜沙堂、
雨の墨うる音敲寂させぬ　蕉
一むしろふるれて紡る市のそ　白

遠うるるの飯つうむあり　蕉
いそうしとはうしかなる油屋　白
秋ふと踏きてうるのれ綾　蕉
月の茶おさへて志ひるふ(イニの名)　白
搭梗うるうや枝ばりの虫　蕉
信茂る髪ハ茶ゝきよ秋くれて　白
大立の頭巾いのる迄　宮　蕉
三石(イニの名)の撥楽やうふるれさう　白
八つイ(イニの名)ゝ茶のふれ　俳　蕉
雁うつる白根よきもひるて、
うち茶ふる馬にをくむ孫巻　白
商人の婆にさしたる沸粉　蕉
ねゝ志やをるいやしの茶　白
蒜の香に出うもつれぬ庵を　蕉

墨さよ長る水仙の蕾　白
鋼の声つんーたる丟園番　蕉
る宮垂さる金も素ぬる　白
蓋荻仁よ栗の葉の紫勾の風ふて　蕉
をいふん細ぬ小の三日月　白
なるまの塩よのほれ八一里寺　蕉
さても明るる時秀こう郭　白
西門の冬ふの時の夕雪蕾　蕉
小草ちちし世い遥なる　白
霧雪の中うて晴なる日ぬをこ丶
水仮ふて捨る青の茶　蕉
宮門て雀と入る影のそれ丶
打うけ垣よいろしの蝶　白

十六夜集

中ちちしと出てふさうふ有蛙　芭蕉
糸伝ちちて垂ちる垂ちる　成秀
ひちちさて咲も拝いぬ萩の系れ　路通
鍋こそけたる青の世ちれ　丈草
ちちしと睡ぬハ垂る駕代碎　惟然
惜ちう垂を夕ふのこけ　格脇
我ものよ訓る鄙のふれ　正則
石の花表の去付城よ　梦江
鴨鶴の森ぬ見ちて競ひり　勝重
衾ぬちうー日ハ時雨ちう　葦香
拍る木よもの答ふ信の折れて　兎苓
流伝亀なれる谷の大竹　正秀
月新ぬ垂れ垂ちる白の上　則
なちちしとちうしこ鳴　重氏

撫子や花踏まれて秋残れうら山　重五
賢のさゝ数を今数へ出たり　蕉
年しの花ふるひ〳〵あれ数　草
花しる車もせゝぬ苔の白　則
考の菓の下い芥残咲　睡
さゝやく事のもろ〳〵ふし　正幸
ふけさ淋くゆ古くなをさして　江
いくつの心よ淋くて来る　水苓
汗臭さ人いかあゝ淋を立る　奇
さめてふそ〳〵も蝉養敢さん　然
見止て流るゝ〳〵ゆけさ〳〵　秀
只一ほとしたのむ保もの　通
はりしいたゞ都の荒のこゝ　紫菜
月をとあてふ中こゝ様立　草

秋風や細の岩ゆ〳〵の竈　苓
栗ひる海の夕ア淋〳〵を　腋
斤論ふるゝいはれされ於　通
分細さを子の及ぶとゝよ　重成
長掠ゝ銀土器成ゆくと　柳浪
ほゝゝを吸て教いはるゝ　成
職人の涙あゝいせる花の陰　強正
南おもてゝよめくむ若竹　青

俳諧集

市明の清て教室中書むし　探志
月さゝ〳〵ゆくる庭のこゝね出　正秀
橋の客四ハ業を為ゆゝん　昌房
子拭筆のしめ力ゆ　死　盤子
廣浦の家辰と人ゝ立させて　芭蕉

すてしたる奥の焼やう　及肩
窮屈ゑ題　餞はうこ帝　墨江
書状をこの[illegible]赤ゝの行　志
ひたゝひ伴賀[illegible]　秀
奇の集　秋　編かりゝう　蕉
出来合のおふるまいんおけ　子
小[illegible]　蕎麦　垣ぬけ　房
名月ふ借りてこふひ[illegible]る　秀
新酒の酸のほうしゝて　江
残る事ふくれい[illegible]　蕉
よのふるゝとて[illegible]　志
吸花のゝれ[illegible]表う　肩
筆干せる春の芸　房
伺るゝかのう一ゝゝうち連れて　秀

自ゝよゝゝる笑態の旅　子
見る外り細ゝゝるもみ備　江
湖水秋呑て胸よさゝ涼　蕉
張家ハ拘静ゝる努因なく　房
簾のおゝ[illegible]ぬけく拍吻　秀
むさゝとゝ敵咄ゝ[illegible]　志
名残秋ゝ[illegible]む屋のらん案　吟松
みちれくや初の芋紙を出仕　子
ゝゝよおゝ[illegible]ぬ絡き猫立　秀
お紙ゝ男子常の芋蕉すれ　房
たゝゝゝゝ法死ゝゝゝ　蕉
一振の実ゝゝ西ハ熊笑の国　秀
浄福寺やゝて仮経ゝる　子
風鈴ゝ行ゝゝ所を吹ゝゝ　肩

馬よ乗りても徒歩なりける　江
雁の花を手折る花ぬし　房
海うしろ人のしるべしるふる　蕉

三井寺の門たくさやうの舞
茶くさ〳〵変化とうしの有れ
役所にて出さし入る法師堂

曲翠亭

乳麺のくたきたる松茸

九月九日乙州に一杯ふる
さへまうけれの
草の戸や日ふれてうれしそれ酒

菓の条

うるハし紀伊の国かみ丹生郡
雁もとまる池に泥の水　昌房
白雲の内より船寺そめて　芭蕉
蝙蝠の火城もろ〳〵有　正秀
たのもれて狼煙の炎家うち成す　野径
そうつて乳城志賀なるところ　乙州
関きにてやかしこなる牧馬　畫好
久い蕎麦と物ありて情しし　珠碩
あこはつ紀まちと秋とは空ふし　盤子
金堀よ入る河のとは一大　里東
田の中よいろいも鶏の打ち玉ひ　探志
芝居の札の米集めりふ　游刀
御嶽うり出る家も不自由に旅の道　秀
拾ひ家ふ志むる茅一の後ひ　通

路通

汐新よ二階の新たつき上ケて　好
蕎麦の白ひのむせるト　猿東
かけうゝや滝を見たの雪うし　刀
朱風吹しほるる菜　水の影　子
花よ毛の鶏ふうしほうしほ舟　秀
豆腐上をにあけて客待　碩
うゝみある義理　理城語りて涸忘　州
墨れと捨しもとの姿見　通
うゝやうふ立てもぬるゝ蓮　蓮
汐のさゝ赤るる方の白廊　香
暮の露出屋の坊を折の花　子
うれおのこの書城明るうゝ底　州
ちと矣もやうゝいうんりふ路　碩
寄ゝのさゝ出屋の金月　蓮

ほゝ記を寄霧に脂城組えて　好
枝のるよのひる筆の篠　任
書ハ十月三史文迂くつ出　通
産孫おゝやる宜ゝ孫　刀
おさへたる嵐城後よ　房
年よ厳漏ゝむ居風呂の漏　子
内程ゝつほとい立ゑを花の名　碩
懲の出入旅やう枝声　任

後猿集

蓑城まれきて　鍔巌

淺妙ほとゝ人の時雨よ年の暮根
火とうつまよ年ゝ城ひを　如行
一年の仕事ハ麦におさ埋て　芭蕉
垣中人ゑをとさゝ出を　荆口

うちつれてちる紅葉有明の　文鳥
山うつ霧をさけるかなしさ　此筋
秋風に鴉うけ波を長いろり　左柳
夕の上をまよる雛　てふむ　如風
蛤幅の飯ひ破りたる蓑の縁　行
会佛の声れ細う雪也る　殘香
別まんと冷きか油わかめて　千川
雅ここちの恵めらとふき　蕉
奥住居留も村表い戸紙ちぎり　口
茶蕎さうして鶏冥に刈　巌
鞍おうを馬い丸雪を打拂ひ　飯
綜る方の河て出うる　鳥
ちりの恵の糸うも菴仏せて　蕉
月利て去をを送るくりり　柳

下ノ十八

葛は糸のおもてえせうけ　蕉
千川
おくに伊吹ばそて中冬ごり

俳諧集

白雪の二人の子に松を松後を
名をあるべく
それ白い拐ようり白し　水仙花　芭蕉
土やりうう平のあるうを　白雪
朝うう蒲あるうを雪の　桃隣
ちやう牡丹の吹ところ　芦雁
洗濯のいう海とうふ青芽　支考
牡鹿ふうう尾ちりうう紅葉　以文
藤ふいうちひ集めう後を押て　扇車
仏風やう鳥声てや　る　淡水

別路の出さんとする小径をくる　桃先
義いとちかこの作品小出と　桃後
水仙さよ月こそ見れ庭を守て　桃鯉
さすこのさくもの宮らぬあよ　雪丸
花をく紀ゆきき坊主の紅ひ　雪
顔やふれたる白雲の方　義
拙の遅ゝまてゆるゆれあり　水
蕗をうう春てうくも接之　者
蕨るかなたをとれ化粧の和をけ　之
二方の鶏のようりつけもない　先
れもうる紀霞の中れとけやね　雁
小網と鶏のとれるいせう色　隣
黒崎の浜もかくをれ明つれて　後
雨よるからみを西の法ゝし　丸

下ノ丸

鯉法る傍よりけふく月城基
松葉の埃よ考る禍　蓋　獲
雑子笛城首よをたる鶏の供
雪降ゝこゝてうくも明　洗　隣
小ゝしと生死温泉の夢をて　考
院も寺鶏城僥ひ猪ひうう　後
やうくに鶴明ゆ紀教の方　丸
浜子の孫ハ下よて持ゝて　義
あの赤ハそやう鶏酒を浜ゝ　之
馬繋ゝる門の井　垣　雁
子あの延ゆくゝる一ゝられ　先
新の志ゝゝて星紀小　畔　雪
咲く花よ鶏さんさら城鶏　車
村城ゝさんて肥るゝ　松　水

風来寺より来訪しと

枝垂れいのり出しる猿藤ふ

魚田

宿うりて名ばかりする時雨哉

ら秋は終て草庵よかれい

門人もつかり来ていふと

ちるよ

ともかくもあらばあれの指尾花

戎講祝賀よ猪を毋ふり

夷傳家鴨も鴨よ似うらうら　利合

元禄五年

賣茶業

芭蕉翁よりの文八賣ふるふ書

吹あげらるるまま実の雲ふれ　嵐雪

帰る鴨ふ〳〵ぬ鴨も澤立て、

七曜山伏出こうふ法紀　蕉

町低り栗の集たる砂畑、

蕊〳〵も窪く溜る馬の血　雪

坊主ふも老ふしと法遣て　蕉

土の餅法く沐浴おそ、

生餅ふ燃法くきふ雨と紛　雪

日蓋て残る払う切こうけ　蕉

炭白ふ法ふき飯をつけて　雪

おふふに新酒よふ眼　茶　蕉

舌根の念佛ふ痩る居士衣　雪

小椎い稲の中ふ法ける立　蕉

扶てうゑ、産汐の船上をし　雪
いさうふひんや峡路の月　蕉
芭る花よ酒根岐雲の氣若　雪
かけうゑ産ゑ和の下　蕉
分のうさも才子の仕よ素立　雪
和泉のかつら桶の石城とる　蕉
紫墻のふる紀都ハ荒さう、
よさも淡うう推て黒石　雪
年ゑの三のひてて生る秋の風　蕉
髮をる高ゑ方をひうめく　雪
長竹よう西の鶏の根向して　蕉
粥よ玉ゑい行と冷ゑらん　雪
山茶花の後ハ水仙梅つゑ　蕉
雪よ嶽玉くゝ貫う馬　雪

有りせん大江の岸ハ朝屋　蕉
削て屋ゑゑた帖箱のゑ　雪
市謀叛もゑ個ハ金ゑ法　蕉
孫宜う秋よ秋も嗜法く　雪
花罪を勉もとの紙思ゑらん　蕉
催こいしと因ゑつとるゑ　雪
赤人も今一しの酒機嫌　珍碩
かゑけ嘆きゑ衣の振辺　蕉

百猶

雪や候よ糞をる塚の先　芭蕉
月も高亜よ屋のあたくろ　支考
やふ入ハたく穀入とゑせかけて、
なくさゑなうゑ年もつゑり　蕉

むく鳥方おとしとなりて、
風も吹こぬふ笹の葉れつゆ　考
哥の今流こうる時肌寒き、
寒さの寄るも居る　侍　蕪
らくしと音をうあとすれ寒、
風うの寒き　俳願成　就、
二三年たつのハ変れそうことく　考
餐紙をやーて又遠る敬、
充変ふハり焼附るられの方　蕪
機をる猶ハ角力五の事、
何不の田へれやうこの明月　考
表明の星のすくをきつある、
所供よ常陸の助も花ろう　蕪
白い後くしにあの紙入り、

下巻

かけうくの金子例にもえにろう　考
よ紙ををつて人の名紙向、
本猶う出れハおのしかこまろ　蕪
金城鼠して銭をはを　蕪、
松風のとんしと吹まる　考
於るようあると若る門　蕃　蕪
湯ハ水の中にふるる水精　考
馬を足よ留ち紙あつうる、
小調市の時うあなる奉公人　蕪
痛うふくれハ女房ともい、
むくに涼しい方の今うう　考
あの板うう板ら〜らの建、
二の丸の光りかやく金鹿風　蕪
雨もなうて本の朝后、

さらしと紫陽の仮装食造　巻〻
に上りて延と　芙蓉
民部の花も咲りて咲そろひ〻
弓居城と　えて　伸る青柳〻

猫の恋ふむとき国の掛方
起きしつつ女ふせんぬるふ條
鎌倉を生て出るん秋こへ
五月雨や磬ろろ人素のさ
晋の淵明孤うもむ

立形は豆葉の芙やたろひ〻る
素堂の母七十余りたり〻れ梅月
七日は琴ふ〻歌万葉七種

千株の芙蓉の手ふやはしの秋

星の数は花史函〻後　袴　其角
りてたとや星の一枝もあさ月も　素堂
深川集

深川夜雄　芭蕉

青〻てもある〻きもの秋庵ら
挑ておもたき　秋の竹　洒堂
昏の方掬のお灯ふせて　嵐蘭
坊主ら〻らの生れ立る　岱水
松山の腰ハ洗しの笑ひう　堂
焼炉の煙をくさす川　魚　蕉
いとひ日の浮う〻アるる小豆粥　水
ふを掬んて洗〻油　蘭
掛たに点のこころ就打せる　蕉
変な蓋ようとる〻下加茂に袋　堂

寒徹を山雀竈の中ゝ　蘭
正氣爰のむ風のかるさ　水
月のゝうにはすみ千石ハ仕て　堂
さゝるとうに沈おさまる　蕉
鶏さゝゝ蕗花の雪ぬ待夜　水
粉智の御山の寒遠き空　蘭
弓はしゆをくゝるゝの息を　蕉
蕗ゝりま馬上の海へ出　堂
町中の寒ゝ石ハ赤くさゝんと　蘭
吟も点ゝゝに聖分静まる　水
草足袋に地雪弦宇紀秋の名　堂
ふゝゝんあゝうの古よ屋の月　蕉
玉水の早苗とゝけいふゝゝや　水
我徐ゝゝも紅紙赤走ゝ　蘭

山伏を切ってかけたゝ実蔓　蕉
強もたれいからぬ世の中　堂
附合ハゝ板上戸まて春あゝし　蘭
ゝゝもしとあゝ毛降ゝり　水
のゝ和て和尚ハ孔よ歩ゝゝ　堂
たてゝゆてあゝ道の大日　蕉
撰あけて水田も言ゝ人の声　水
遊行蕗ゝあよ緑撰り　蘭
不ゝゝゝゝ沈雑鮒の真赤の市　蕉
出城ゝゝ四ゝ土間の竈　堂
茶ゝ升人ゝゝまたら死ゝ芋　蘭
雑ゝのはゝゝにさゝゝ茶州　水
之日方よ地ハ飛しそハれ死

名月や門よりさしてむかうから
十六夜の小雨にうつぬ秋の風　許六

深川集

前栽や水田のうへのいなむしろ　洒堂
雲うつる日よ代こうへる雁　嵐竹
夜うつり蔡い馬の音うして　芭蕉
叢叶けふる道のうつさめ　北鯤
古戦場方もまつりをみ流り　嵐蘭
去うて送る我宿の笠　堂
さし汐の門の柱よ寄て　竹
雲を吹き入る望よ入る虹　蕉
巻薬よ扉休ませうしろ　鯤
水仙咲る房前の伝よ　蘭

十六夜集

秋草や日数経ぬ秋の露　芭蕉
青紅葉きをにもる谷川　岱水
野分うつる居村の習地宮りて　史邦
うつむかよ蓋瓶の蓋　半落
恠附て餓鬼の狂の叫　嵐蘭
ふてこいうる草の引うる　蕉
年寄が土打ゆるをゆよ　岱
徹防の音湯よ沸つる　史
矢筒の葉枝たく重石の上　半
やさしくたるよ咲る接ぎ　嵐
匹つ折のふんよ表ら丸く麻て　蕉
抱出中よ沸うをを青　岱
月雲れて雨の降り止む星吹り　史

早稲の俵よりはちくかり立　嵐
狗虫にやまく乾さるく秋の風　岱
香よ赤子成ものをる小坊主　史
花ものあとと見えたる土もれ下　半
細き井溝成の日ほる若菜　蕉
芝風よ八十ものもる猿芝居　嵐
のくにおらを伊丹もろ白　岱
流球よ地帝あるの表うく　蕉
是ぞこの除いあらん物　役　史
[illegible]　半
嫁入をうらやむる引　蕉
油ぬらに染をひくの盆をて　嵐
月もをひしきされる油の糟　岱
門赤を百石ろの門うまく　半

云奉よ屋たる赤良れ坊方　蕉
傘とひろけもあへを俄あめ　史
乞る用も異し半の日寝　嵐
出居へとよも隠居れ出られ　半
干物つきやる精進の朝　岱
よ拭のまれてまを云つのく　蕉
駐若とをきこむ板敷れ上　嵐
人はく毛利細川の花ざり　史
聲も賢なう雑の勢ひ　半

韻塞

十方言許六亭　芭蕉

ふなろう人も年れ初時雨

野ハ仕付たる麦のたゝ土　許六
畑実城實ん小松の冷味して　洒堂
付の麦えたゝ秋の風それ　岱水
右の方へ入ると古たくみ　嵐蘭
先ユまそろ牧屋の釣やう　執筆
おそろの傍半中小たくされて　水
焼集ーたる小鳥もそ清　蕉
祭ゆむ笹の葉えに明そう　六
輾磑（テカイ）城の日る京良の入口　堂
すをハ鶏ハ鶏ハぬ人も寄そ　蘭
紅追のけて蜻の食あそ　水
霄閑ハあゝふる弟の京迂　蕉
ふゝ萩の風そそれ立ッ　六
八方ハ旅れもそれ小服紙　堂

焼山ここのそれ赤もけ　蘭
お記を畑も花の木伝て　水
ゆゝも長宗よ鶏の卵ろ　蕉
芸ふゝく医者の家ふ医や　六
當摩の巡城酒よ酔ろ　堂
さつそうと鶏一本ゝ言て　蘭
お芭たくそそ蚕く長持の上　水
灯の影めつゝ紀甲　待　蕉
山時そ中ゝ紙出る多　六
旧達ハ新の志ゝ焼ものそれて　堂
風月よかゝ家ゝ義れ女房　蘭
いゝやう紙芭も志ゝ紙ゝ長　水
琵琶城うくえて出る物　蕉
五明ハ門堂の小方丈　六

舌のよいくぬ孤　やゝ　堂
一をちも青紅葉のふ紅葉　蘭
簾踏こ下る苔根路の坂　水
冬長のうきすゝ白もふての涼　蕉
菜屋たゝ　おむ百性の家　六
ゑ紅のまゝ　ゆめ立て出る神菜　堂
七十の賀の若菜　笙　蘭

深川集

支梁亭　芭蕉

口切よ壊の盃をふつゝ紅
牛のゑん出を殺の初氣　支梁
ふゝゝの蓋よ絵くへ紅卅もゑ　嵐蘭
秋の蛙ゑのさるゝしの形　利合
旅人の鞭ゝよ月の明るゝ　洒堂

大戸成揚ケ小出る緑分　成水
鶏の卵のうと成産そろく　桐雪
あゝたよ指を踏そむるゝ　也竹
みゝゝさ沢六田の柳ゆ捶て　梁
鮎菜ゑゝく寸大豆の汁　蕉
細うふるゑにも志ほる懐の水　合
提ふくる宵の　拯堂
ゝゝしと鶏義ゝなる石垣　水
酒てを食よなゝ安紅月　蘭
り雲の長門の国成秋たちて　堂
義よ指り人一猪の　清　梁
西日入るゝふの屋の間ゆ家　竹
苣の二葉のもえてほのゝく　實
ゑやこゝい去年のり掛出いれて　合

見よ博くく釈迦堂のくれ　堂
咲ゝめて去のふたうれ樣を了　蕉
名のおゝゝこう枇杷の葉を　蘭
元卑して渡ゝもるよ旅の宿　實
清けよ住連とも也る社来丁　竹
日さうゝ貓うる赤紙爰ゝろ　堂
ゝとしれ房のおらん川に　梁
水つきの稲の穂ふ肩重し　合
ゝえ美えたる門前の坂　蕭
皮剥の物煮て食人育れ方　蕉
上毛吹ゝく自日ろの鬱　實
谷つゝひ流しうけたる井戸　竹
古日拭ゝうゝ二ゝろふき　堂
あゝも簾ゝゝふれゝしゝゝ　蘭

下之九

盆よ美ゝる丸茶の数　梁
花さうゝ御室の路の人通り　實
麦と菜稗の野ハ綿ゝ合

深川集

二日御巡宗鑑う客奠茶一斗天
五斗下戸八亭主の仕合ふゝし　価堂

洗足よ客と名のたく言ゝ　許
俳諧ふゝ物ゝむゝれ里　許六
ゝゝゝい隔よの猛狂ゝゝ　芭蕉
去いゝ代ゝ草もたり　嵐蘭
方のゝ永ものゝろふ紺賣　六
築地ゝ宋よ典茶の弩　堂
相国寺ハたんの花ゝ　蘭
梳の蓋とる藤よ筍　蕉
西衆の差意ゝたゝ系陶ゝ　堂

むら雨ふる鄙の法をとる　六
さぬしい育れ浦の苫屋をそ　蕉
東　遠きの月を洗さる　蘭
青湾の板よ宿を露れを　六
ふるうの柱拭跡先よつく　堂
茶うけの秋打志めす朝おろし　蘭
汐さゝか汐軍汐れ搗　蕉
村い在田面の苗育を立　六
塚のうゝひのもゆる石原　堂
虚々僧の心よ迴ゝ茶煙　蕉
今い被き〻今川の家　蘭
う清うり後撰の風を添　六
まとゆ〻ゝ巴國ゆ已紀　堂
新参に湯うたる無茶　蘭

下ノ年

よこれ〻稿よかくる麦れ粉　蕉
馬うゝ戎侍意つゝ紀井戸の湯　堂
月扶よ髪戎洗よ掾出し　六
火焼して沾あてかゝれたち　蕉
ゆ〻積をかくる年のお成　蘭
うゝもうと門の尾小雪降て　六
う親音にうゝ峠戎える　堂
今をやるゆ脇織を忘れ立　蘭
奉りの後よ誰も伝ふく　蕉
義垣よ木ゆうゆゆる堰の内　堂
月い赤う出る二月朔日　六
うゝ花よ伊勢の鉢の元知　蕉
弱撞（クスキ）茶やくゝ宮川の上　蘭

鄙懐紙

深川菴

月さゆ残いそ〳〵やゝこ村時雨　千川

小松のかしらそろへる冬山　芭蕉

雄麻こゝ巖の透間なれなれて　此筋

水中つゝ白き海へ出る川　左柵

洞ろへこそ絃の酒屋も一里程　洒堂

猟まおし〳〵巡むれとうひの船　海動

初出てふくさむ日あり草刈雨　岱水

苔ゆ係ゆうゝ〳〵南天の花川

笠とれば前鬢もゑむ菅鞋掛ケ　蕉

かゝさもいさむ大酒　嵐蘭

高館ハ年穿鑿まふ〳〵てゆく　柵

水風呂立る雪の降り出し　筋

殺くゝと藁を乳〳〵る蓑と鑵　動

傷寒やゝ〳〵ゆるかなる水

伊豆の海御湯ハ私と清入ゝ川

一ト夜の法ハ宗旨定る蕉

鄙懐紙

本拵〳〵ようめる百ふを死入湯ゆ　荆口

毛を引く鴨とのをる俎板　洒堂

愛乞の中振うに待ゐて　芭蕉

ところ〳〵ハ木履ゝ反　此筋

梨の枝むすゆ残ハ芋ハ力　左柵

桶ようゝこと芋売のあく　大舟

秋風ハ架こしらゆる鷺ハ　千川

嵐のゝ〳〵たる梁の弓　蕉

六月の日も照ゝ三ゝ作の木　堂

手枝の入〳〵ゑ縄ゆるまる　柵

袈裟掛けて供とる浄土宗　籟
蕉面の流のくもる山陰川
幾ふせの弱名たる紫陽花　舟
儀よ豆の葉ふ枝しとく　秋堂
月代もふらふら星ぬれ豆宗　川
を探ひうて馬の吹くか　筋
面ハ今氣よりとれぬ花菖　柳
蓼の上よのほる陽　岑　蕉

秋雲やかけうなる橋のうく
　拾遺就して
ちちやいくいてふむ橋ぬ雲
雲をふ深しふむ住居うれ
月花の面よ針たうん宇井入

桃實集

水ゑよ佃ハ北ぬ忠ちを　瓦峯
白沢文よ芦静なり　邑蕉
中級の酥も沢よ捧挑て　洒堂
月の徑よ沓拾ふらし　峯
鳩吹て榎の実こはるとろと　蕉
板の橋をふ赤疫かさねる　堂
簾戸ふ袖にあ紀日の揺り　里東
君いとれしふてしこの時　蕉
法出して出異ふふ舟よう　峯
御会沢して孫余とかり　東
門ふ明日の僕と配り玉　堂
遊蹈ふとくは法拾貂　峯
山陰城まれよ出る牛屋　蕉

梨地蒔け兄のさけ　鶴堂
名月よ雲井の搖籃一まさけ　東
今年の茶筅肖員嗚しに　蕉
花よ来て我名い備　徳堂
芸いかくぬこ鶏の人右　東
陽炎の立い揺へる株おて　峯
たくぬ衣よ蒔蒲れ至　堂
きんとくよ眼い後の抱れも　蕉
意のあいれをみよや鳩胸　峯
株うへの圓ハ志ま〳〵浅田八後て　堂
芙流い伊吹てさむ紀秋風　蕉
夕月よ荷鞍弦下を玲の音　峯
蟾ふし陶をる質の出一入　堂
麦鈴よ交らぬ飯とうかて　蕉

遠利引をる川舟の舳　峯
帷るよ風もを〳〵紀中小性　堂
明日の返事と芙蓉の　其角
くつくしを多け匂ひを紙せてる　峯
人目よたつしに引おくる陳牧　堂
一点よ地を接現の花さう　角
腊よ日のさを芙を弱めく　峯
雪ハはころの石よいしに吟　堂
茅且帳とくれ盛のける　角
句兄茅

十二月廿日帰真　芭蕉

折よりて花入されうを椿
保こむまれる事の宿　彫棠
用よたくぬ住ゆ青ゑ引へて　晋子

羽織のよさふり袖人　黄山
夕月のあふさけおろすん肩　桃隣
出ういうをさて秋をせいた　銀谷
岡小成る衣いいゆる樵の音　棠
肩てやしうしん蛇の県の親　晋
見もしよ茶摘いりてけ此花　杏
茶を煮て上を洞徹の学寮　蕉
下張の反古えんをく枕して　山
作めたい猫の多弦ひそかまる　隣
ひつうしや徳よさしも蛾此魚　棠
硯法度と急ぎせうろ　晋
（十二夜）
豆の雨宮の方て屋ちん　蕉
三すの残る残したむ唐　隣
さ一つと違をとやを軒の月　晋

蘭と菜とに主をさうる　夜　棠
点ふる和尚しも女弦ちさ屋　杏
鳥さよ水弦上る箱戸捆　山
山雪のわうふ坊い辞なり　蕉
眠りかくるの合歓の下閨　晋
うけむひ塚屋る床のい屋　山
れもいぬみよ豆の待　杏
氣をして曹洞宗の音かよ　隣
集すをふいしよ弦やく　棠
月ぬふうの主人よ急弦部屋　晋
をうをすかかくを傘一　蕉
弦ら一紀里い破けて教者　棠
波りうしえいま声いく紀乃　山
松茸弦近い路うい伏山よ　晋

そくさいふみはづしにあり　奇
老たるハ邯鄲ゆめに畏り　蕉
花のかをくゝとこゝ揚貴妃　棠
附さゝ枝中にいる拙き山
さゝゝの紅の湾く三弦　醒

小傾城ゆてふらんゝ　晋子
改巾ゝゝふ侍の蓋物　溪石
吹をゝ猪のひたのゝらみて　芭蕉
かゆゝろになるし　盃　普瓢
姜盤伐ひゝふ彈く市の中　盤子
いつも自由ゝ出湯のり　水　史邦
井餘の蓋こにふゝふ方ゝ　去来
胸をゝたる早稲の朝風　文艸

下秋五

恰のいろかひあれとしれ
えん孫六年
人もゝめ芋の後のゝれ松
去来のもゝ
黄菊のさゝゝすゝ松花

春と秋月

衣裳して梅ゝたひる旬ゝれ　曽良
嫁ゝらしむ入りの松　嵯山
掃ゝて消る雪をかゝふん　路通
石のゝ用ゝに墨ゝゝゝ　芭蕉
月移る蓋のゝ紅踏ゝて　山
のたゝつ猪のゝる芋畑　良
綾のゝゝ清ゝなゝ秋の風　義

いのね際干を宮の面うけ　通
あちをふく義ゆりたる岡の脇（イミル）　山
寺の物こうのる罪の除さよ　良
振をとゝケて越あてられぬ犬禁　通
聲の利益を町よいろめん　山
を仰ぎの酒のかゝ味も附こう　良
方も今宵とゝん人野馬は帯　蕉
物衣をさきめられぬしに赤ゑて　通
我ものもれ多ゆ残る芝山も　蕉
花の内宮の陰よ注せけり　通
古巣の姫の子ゆいもたぬ夢　良
講堂よ侍をゑゝふきれくれ　山
流よ立つる悪あのれ　良
形代よまゝ若ゑゝ浅連肩　蕉

下ノ卅六

こほろ星の宮ゑ　風　通
やねふきもにおれゝ不破の笑　良
植ふくれたる田丸中の小田山
ほゝよ侍やせて宮ゑや鳴ゝん　通
我ものふもいうゑ世一人　蕉
山魚残いとんとゑれを吹いそ　山
うたれてこゝる中丸戸の繁簾　良
格よ目残とゑゝとの星夜　蕉
侍ゝのたうゝき谷の　乗　通
火残禁て岩の間も冬義　良
岡残ゆよのこと　頃　孔　蕉
れとろゝ浅の自餐と氣にうけて　通
折よのせゝくゝ草のくゝもの　山
入とて舎うゝ野の花の奥　蕉

伝これを中しに玄扣ちく雲　山

俳諧集

五人扶持うけてきさらぎ柳哉　野坡

日ようしに雪解の音　芭蕉

樵家の自炊ちらちらに山こえて、

そこら城うける維盛の勢ひ　坡

ひたかうあてもあけぬ小の宮、

酒利まはして酢を買ふり　蕉

丸三年旅うし孫へ孫をして、

境の云事の今ふ恃せぬ　坡

玄白まれも拓も多の羹、

うた世の雲たえて後寸　蕉

瓊脂まを栗を一日搗仕舞、

教入をよとなふられて注　坡

鶏頭も頬うるる秋文て、

羽うちこの八を雁まを新　蕉

口しにてとしれ酒城試ふ、

ちうい佛へ朝のとはしへ　坡

咲く花まを十府の菅蒐あそぶく、

ゑ弔茶畑も摘しはうまる　蕉

さらしとよとまぬ水に玄の風、

餘の市まを心まを月ちらし　坡

打笑ようせのとゑ供を自眼、

やさ味噌の灰ふをそらひて　蕉

一掘りくてあつめ〜屆　怡、

ゑ人も移雪のろうと除　坡

お歯黒をもらひを中戸さ祝、

むぐらの栄耀今い若よやむ　蕉
市原にてそこそこふくけうま、
弁ばむよい教うるうとい　坡
方丈ゑ小参仲宵の侍ひつれ、
蕎麦うつをとはむる肌寒　蕉
ちらしと相の栄ゑるゑ水鉢、
書付てある釜の鬱古日　坡
粥とう紙おこされて髪けつ　蕉
猫才変うるくを急し紀　坡
竹の花の栄しぬ立まか有ゑ　蕉
帚目のうつよをしの様　華
俳諧集　湖風
水音や小鮎のいむ二俣流
折もをさる暑の刈　様　芭蕉

乙切ゑの前出て　法蓬
刀の柄よらくる状　翁　利牛
食傷の腹ばしり朝の方　風
豆麻てあるくを盆の友達　蕉
小ゑすへ小家ハ本接の丸出し　桃隣
紙一文ゑ下駄代借る通　牛
昆蒟の色の悪ゑも孫ら　蓬
糸のをゑ忘い殿の数　曽良
くるはとのてふこと雅の孫　蕉
古き簾ふこら鍛冶る風　牛
小さうても砂場を歩く乗馬　隣
桑蚊を焼てたれの食そめ　蓬
方丈の白。俳の参弁　蕉
盗人うへる蕎の朝　蓬

沓掛の陣ふのこうふくれの雲　良
ゆくも雁　合よ慈うつ　羽風

鄙懐帝

丹中

傘ふれしふるえたる杵うれ　芭蕉
うつの美まむ　塩の煙さし　濁子
はるかいまと巨燈とともに　涼葉
侯の去る孔いんてやる　野坡
せんたくをしたう術のうち　利牛
登らまてうと出を吸もの　宗波
湯入り流の今美沢で浮世堂　青良
恵紅の扶のれ　合て　立蕉
ちひろし慶業の茶屋を長橋　子
ゆくも暑を東を出てけり　牛

伊勢のはれ又長箱紙してい　野
れてうつうつ道ふの沙汰　波
金拂ひ名月まてい延られを　葉
のぼり日和の浦の初丁　良
秋もてや外てはうし尾張　蕉
清洲ならはるの髪結てやる　波
左ふうまを出れい花咲て　牛
瓢の燥をとらふ麻稜子　子
去の元十方られの花と　野
泊千ふ生もとしむ精進日　蕉
答泉のひうは酒を奥も長　牛
えを振ひ者めうつ　乗
ひつうを筒家に老名を味　蕉
まるくちをする鯖のやれ物　野

往云も毋こゝて来て寒ク　牛
本御ふきたれこゝ安の里　義
足場より紀方の畑反一筋に　子
麻畑へ夢の睡たそうろう　良
会佛よ小さ紀新い対物　牛
紀又十日よ居おく古　秦野
義信ハ麦も近たる麦ね　信水
芋人たものゝ成とへい稲　葉
男子ども稲ひ仕そ紀豆の辻　野
麻へもこゝ中一年の青ほと　牛
切り株も芋本いそれのゝ紀麦に　子
うけろ人麦ろ岩の細流る　良

義はそよ

西待の庵もあん家の庭
許云紀ろ
樹の葉のんろも似よ本ろ紀樹
ろそ人の樹ろもおら本ろ紀蔓
芋物や菅ろそ一ろたやめ竹　移風
本ろ紀ろ和すし紀来を彩んろ　其角

炭俵

元豆のろれ咲麦麦の緑　琉屋
屋の水路の乞る溝川　芭蕉
上張りを通さぬ不紀当ろて　宙水
ろ紀とのろけ紀波のろ中一　利牛
麻本よ雅も麻て居ぬ麦芋　蕉
とたりと堀のころ人秋風　屋

こゝろし次第の不ふ吟出て　牛
魂の仕業の工夫こそなり　水
吟をとゝんふうらもらも　屋
俳諧のもと〳〵せん多減をる　蕉
風流うゑ表明鳥の帰りて　水
家か流をと踏減えより　牛
鶯付てあひ去こう鶯あうて　蕉
柔の買ひ垂減下て愛出ス　屋
世云ハこゝやゝ花の辭ゐる　牛
拙し抑を今ゆうゝとして　水
雲の涙吹たうしたる飛方　屋
ふゝん丸けてものおもひ居　蕉
不孝ゐ傳と中のこゝろ　水
ゑ出ち語を減上ふうゝ　牛

法華のひとこゑ出まし深草　蕉
垂ゝゝれたる金減たつぬる　屋
芝の俤をゝんて落れ行芝　牛
宮を送りてさける猶　屋　水
今の月に雲の屋さをたゝしてる　屋
年貢減んとと蓋られたう　蕉
悪災に祖父の白髪ゐてこ法　水
惜悪ふらめ七夕の照り　牛
居相の月に合せられ芋畠　蕉
ゝゝしいをこゝろふ家　砧　屋
世法ハ南の通りもうれらきし　牛
己の根除の祈こうとうく　水
まこ雲にろ月しし風の吹出れ　屋
さゝゝの上まゝ花さへつる　牛

花見ると女さそうて蕉
余の方のあし小菖かんぼく　水

深川にて
玉ぞ敷たや風おとうち乱れ　史邦
玉突の笠たて
あさうぼや屋い潰おろす一つの恨
朝皃やこうれもすくわう女さん

翁草　史邦
仏さうを中教ハ的を見定めの色
おのれしと蚓　筆止む　沾圓
外為しさと数よ方小出にて　越義
手下にさて白とる板の矢　書

栗丸を切る川上のやま　史
おろしと形のおし丸拾ふ　可
寺よ傳をい居る麦畑　蕉
雨ふて白く咲たる蕨の花　史
細父ぬくうの紫にとり付　沾
ふともくふ貧乏神と名をなて　蕉
絵馬城かくくる年越の文　可
さしと雪ふむ道ぬ乱れ　沾
見世城叩てとだり出さとる　史
狭捧城戸塚の者の侍馬　翁　四
脚疲病のとやりきれもる　意
もんをうと苗代めくむ花の色　沾
光こうにまぬ伝聖元ありの　可

春風に吹きほころんかぞえ衣　史
質に流るる百両の　家　治
さとうるる　疲るる　花　て　可
蓋しわさうし　白　垣の　枝　史
掾土殿離れさとうる　陸奥　蔵
弁　為ほとくもとの　居屋　可
うさ事の　佐渡一番　出て　治
忍たる　紙　切　義　武　子　蔵
かちけうる　紅　ふ　松の　可
秋とぬらを　の　治
所　ねの上　風　史
もらしげうも　迎ひ　見　可
とくとて　院　家の　里
夏も　ひとれ　乙

雨ふれいりのとに　土のふほひ　治
絶てかくすす家　ゆうべけり　里
垣ほ　間　かを　れさうう　治
家良いやりうう　八重　治

小文庫

帷子の日しにをさすす　史邦
紙　外　稲のこと　貸　芭蕉
蓑の　小　けひとか　貸水
板布　人のたうる　月　邦
木刀の　たる　合ぬき　蕉
二階は　れうを　裏　枝　水
寒さ　小　の下を　吹　て　邦
石町　色　緑ちの　陸　蕉
細工　雑　者　れが　屑　水

よひこ（せとも須ぬ小松魚　邦
肌をも紅藍の朝菜のミ合て　蕉
秋入とさの節氣いこうる　水
極度よ傳りにくきたるこ有れ方　邦
五位よ有ふし者のいさうひ　蕉
拾ふ一の新刀も猪くさう　水
工夫家のこゝさゝるる　邦
花よ森ん一ゆこを記者こ　蕉
小性のにれをゝ三　水
牛搗の肉ようゝむ亂宛　邦
馬の糞うく役もいそうし　蕉
ゆゝ言に法濯貸成ふけ巴　水
とゝぬもろろし鶯くれ弟　邦
振うく ふまれ中一点洗寸孫　蕉

汗あ〳〵かさ四日い志られむ　水
表れひのこへて家る塔さた　邦
百里そのすゝ私ゝ刈し　蕉
引割〳〵せ伐找木の行れもひ　水
うもゝれぬ中ハ生うべ　邦
云たほと孫よ金ふ紀方の者　蕉
ゝ〳〵猶然待て晴のけ〳〵い　水
ゝう社よ極てゝほく震ゝ　邦
障子重なる者うへのう　蕉
小ゝふゝ言ふるゝられぬ紀法　水
二枝三日の終るあこうほき　邦
考へてよ！れ美ゝ紀さう　水
百性ちをむ苗代の陸　蕉

老の名残をもとりて四十雀

亜僕

鶏頭の花のもとにしるしあり

鄙懐帋

仲秋雨懐故人　　濁子

名月はたゝふく雨のはれさまて

窓より花のたゝぬ生の青　　芭蕉

秋を経て色小定まる石の色　　千川

すこと生るれの酒のこゝろを　　涼葉

殆たゝぬ鼻紙おもひ懐よ　　北鶴

曲ま入板の下よりえる蛾子

掃人の矢そのけよとまを振て　　蕉

蓋を定より雪のちゝみく　　川

入口の障子をたのひるり　　鶴

そうの鶏鳴よ終板とく　　子

糸こそう狂くいかりと夕涼　　葉

怪う蓋こふに俳諧惟る　　川

伏見まてりふも足袋の庵掃こ　　蕉

飯の強きもムハおるく　　秋　　鶴

力数よ麦かとそ思へ烏帽子餐　　子

厳の葉のたひたる　　露　　川

花笑ハ木馬の車賞そうて　　蕉

はうもたゝぬ云の彼風　　鶴

鄙懐帋

いさよひ　　芭蕉

お閑のけ

拂私の垢をうつ白々淡粧　　濁子

近々小雑炊畠ゆゝ付て　　仲

肩のそろひし一茶の持次　俳子
又うへせハ京根ふ月に聽る射しられ　子
青菜煮う香の田舎う琴う　蕉
ちりぼたのふとと女房に魚を見て　水
叔をうう湯ふ山伏の髮　蕉
若皇子ふと十ぬて草雜奉の　子
渡しの舟てうの名と少　俳
鵲の巣に赤と沈の重りて　蕉
くけ物曲輪掃のこを塠　子
梅の枝下しかひたを言れ月　水
蛺ちち待る後のや物入馬貫
疣ふる沈ふる沈沈了ぬう　子
うらを果てや琴のうし　蕉
都ふ十日も遲を花さう　曾良

下り四十

瓜をたてうる獨活の茹物　水
年礼を御作の下人よ隣て　蕉
烏帽子うふを八元も陰ふ　蕉
持つをぬ山を刀を右にかしたり　子
よれい跨たる馬のゆう髮　良
芦川やとやう青の波を踏ちう　涼葉
遠祖のやしうう方沈えうう沈　子
我恋ハ千朱の茅沈積ミを　蕉
雁も大事ふくけり文　葉
眉飛るをうう似よう水後　子
大原の相屋星ふ人沈　蕉
教多く繁けハ年も富貴　葉
冬のをふとにおのしう沈　子
初時雨六里の拔代伝ぬて　蕉

老のわすちのいと枝たもし　廣
朝をとをあ鶯の紀を麻そと　子
筍あり〻古　猫の　道　逢
雪ふらい雲車に寄ることの山　雪
うす風さ〻風谷の細布子

嵐葉　性

秋風よりて悲しとて　素の紙
嵐葉　の孤と秋思ふ

茶のうもと世紙の秋とちうち　其角
茶性と麻

角のうと〻いの机の竹編れ

雪雲

鄙懐帋

十三枝ちうつ丈寄ぬうちうれ　濁子
小袖の糊のくれ落　雪　曽良
焼飯よ瓦の粕後に　雪　芭蕉
荏胡麻のかうに四十雀つく　史邦
雨きうち笠の干反りの志う合　杉風
後うを流を風呂吐水　岱水
うう麦とうを朝うけたううて　涼菓
幸をりい栗拾の実　蕉
松枝をさ〻揺ある寺門　良
ひう〻蛾の冬のこしら　子
桑の芽ともくことぬをして　水
なう〻くうへ人孫落るく　蕉
うに月松麻の衣の新ほし　邦
雲十月菅ふ　莽　刻　秋　風

未度は行よりかけたる紅葉の如　子
葉うは花こそ〳〵行器の食つゝ　葉
はんの汁と華はなくらむる初花の　蕉
雪時て旅さみるをそら　邦
藤をそうも指と動くひゝ　水
中庭ちかむ見こう勝え　蕉
異なる雁ばらく経ばなて　葉
新よハ似とめ饗応の如き　邦
さうるる隠居の杜丹又て　風
稽くつして出るをなるる　水
笠清むる教の返るて義も　邦
見ハむくまてにあれりう　良
よられかる衣は縫が裏装れ　蕉
伯母の法ゝ酌人の点ゝ

ゝの有実拙の梨の種りけて　良
枝もく案の拾ちひとよ　葉
露霜小玉ゝそけるる蕎麦ら　子
ゝゝ細目よ明る着　良
初雁ハおもひの和に寄りて　水
偽ゝ扇風を返を多言　風
義ふよられかゝしら空拙　葉
ゝや鎌倉の道の若州　邦

素堂亭

ゝ伊の宴戦弁合の人
偽ゝゝふ秋菊紙紙
ゝられるいや屋ふられる屏の
案の気味ゝゝ流せ芋の中　桃隣

抽のうちに記あるうたなどに此歌
をく留るもあるべしとうら 馬蒐
八雲のあるもあるべしとうら 泊園
何矣のかたしてをんなの投 書良

竹田君人と琴を弾て

うらーもぬ琴をもたらす歌舞伎 素堂
鮮つうよふ板をのもの大根し
鉢やをもて試られいろ気を振 野坡
弾遣あれなるうの土大根 泥堂

炭俵

廿日 伊川古良

振うむ有れく遣ひ 傳
ふりてはやをもの明るる 野坡

番頭ら掇の小節弦境うねて 紙屋
行元ふよ有ひ人をうれ 利牛
好あの餅をいを絶ぬ秋の風 坡
りあの安を圓の家雲 蕉
細の者迫つをあに書けて 牛
里をへをえに二十八日 屋
ひをるれい財よ軍れ大事を 薫
俗氣の雪ま雑俵もせぬ 坡
明をりむ智れ灯を反絵して 屋
肩癖をしる陽屋の青菜 牛
上是れ干菜刻もうれをら 坡
馬を出ぬ日い内て点をる 蕉
絢買の七ッを弾ってう弦を俵て 牛
嬢を門ある五十石売り 屋

此時の孫鬼もろ弦をる石と花　蕉
砌に暖のうつる　青　牛　坡
我畠の糞も霧つく雲れ上　屋
吹とられたる蓋とうゐ　牛
川越しれ菊しの水とあふるう　坡
本地の寺のうを死義　蕉
干物と日向の方へいさせて　牛
活出を鴨の苞月くくるう　屋
生涯用ふうと世をたつる糸往　蕉
まうと沙法ふ小狼　屋　坡
うとうとと大晦日も四の蓮　屋
去業の好む狀の往　牛
中ようて傳米合の傳きて　坡
聖をたとさて産せぬ夕月　蕉

風やうて秋のかもめ風さうう　牛
鯉の吸るの綜をひうもる　屋
ちっほらと系の揚物の関　蕉
同黒糸りの連の孫ちまく　坡
とともかも花の二月中時分　屋
藤炭のちうを掃ふまうせ　牛

炭俵

雪のれをれにうえ人を八ふれ雪し　秋風
月の出る蕉の赤を冬　孤屋
下着と一面侯ふうちあけて　芭蕉
出ととふく大名の　子珊
牙ふあたる風もふ川し蕉力教　桃隣
栗をうれて度き　畑地　利牛
熊谷の堤されたる行往の水　岱水

若こしらへて繋ぎ置る　野坡
二三尋の藤瓜もらふ門の脇　珊
馬の糞拾ふのさかる丁　松　泊圃
井の皮雪踏れ替る夏代来て　石菊
稲まるのさとを高のはらし　杉
まゐ者の一人もそぬ浦の秋　坡
うつさる風のそやる盃を　利合
青しの方城ゆらゆて揺さ立　依々
脊中へのぼる児をすぎる　桃
茶むしろ月陰ばく上る茶そ　珊
川うら吹くに小船いらすする　菊
郷里ゆられて気味よ紙屋　杉
賀戸へまゐられを山へ引通　岱
起もひろく書しと歌かう　孤

下ノ巻

とて集めてい多れ精進日　曽
餅茶を搗て俵へそう巡　桃
わさしを せて茶代の礼　依
雪糸てふくいと自腹ゑ紅ち巡　泊
隣へ引て火鉢ゆうて来る　珊
まとけども佛の供て塔を羽　牛
損そうつうして賢と新し　杉
大坂の人ゆとられたるそ所　令
個城とゆれい祖母のきよ入　坡
そけぬる所前の箱式ゆうう　珊
次の小紅屋てたよむせる声　子
約束にかそて居ゑ小数に食し　曽
七ッの稚よ加賀寺よ来る　杉
茅屋れ面あそそ内にふる生て　桃

男文つとよ蓬そろゆる岱

鄙懐帝　路通

水仙ハ見るる紙子哉　杏雪

宗の細目よ云らく果日　杏雪

我猫と壁を猫通ひ咲て　芭蕉

干ことれたる絹張の有　亀仙

朝顔よりあ絲瓜の口を合　千川

仁といそれてつる白象　執筆

舞入よ菜摩とのの名をう　杏雪

急よ古瓦の残る奥　をぢ　蕉

ゆしれ寄かさ付て見ゆ　仙

取つもおかしう育ッ然れる　通

斤星ふ拭つとつる布をう　蕉

傾そかへ立くろ有の元　雪

ちらしと業度かしい蛍の光　川

一解あくる雁の翁　家　仙

おふしハ捨所ゆえまるあの沈　通

乱よう後いとつぬ寒号　蕉

猪猿や主下ふ見ゆ花の奥　川

雪の令衣をゆくるまこう世　通

はるの上をう花世にまうて　蕉

彼岸ふいると捨すゆ　仙

り寄ふ中ふ我よ仏ゆ　皆

云ぬおもひの志るく海　息川

元祐のほつれてかくる衣ろ記　通

人の情城つ水ハ稽　笑　蕉

俳ッ出つ義さく秋ハ急しさを　仙

俳帝　さこと本ろ社様笑　通

月の有亭主屋持出よ　蕉
拵たる舟の底ほうりけり　杏
庵人の新宅ぬてとんぼ飛つきて　川
出ばくく俗まねとこつる　僧　蕉
角えーもも山ところえぬ　通
塘の氷筑降うりむ西さ　川
あけぬのい紙上はたく　角　仙
あつうさかーら筑ふつる青柳　通
花さうう靜っ寒と敷こんて　蕉
うくひと拵の中と地のてる　杏

鄙懐帝

芹焼やとそ梅の田舟の初浪　芭蕉
拳ぐて寒ー卵屋ひ　雅　濁子
鐵下に絹をむーろに為ろて　冬葉

わしをぐひうーー仕掛の木　蕉
うを月数千鰯俵の数さくに　子
伊くむ牛もえぬのさ青　葉
嘉嘉の小村小征筑ろ入　蕉
援のをくのとろ住連　縄子
求食為ふ堀婚の旅いーく　葉
拵てひーちふるーめる糸　蕉
月はうーい孫と吸為ろて　子
和田接又ーも招　蕉　葉
麹元の来ていを葉筑荒なる　蕉
余ぬーうーー花方の技拵ー　子
出ーうと新ーて聲れ雁れて　葉
松もとーとも為備の稚　蕉
富ふぬ金ーーー花の住　子

破　蕉
雪國ハ去ぬ雪ゆて馬れ繋られて　蕉
日記はやうし一帖の紙　蕉
旅癖やふる紀五月の虹ゝ有り　子
名残り哉かとく安乎氣賀浦　蕉
青信ハ人志らぬ伯母もなつ色く　蕉
元禄甲子の酒の真　厥子
焼たてゝ庵小鮒ゝとる紀の方　蕉
中ゝと蓼食ふ紀ゝ机をゝ紀り世　蕉
寄り聟ハ伝り法華に移ゝて　子
ゝ紀名ハ辰の市て魚とる　蕉
ゝ人絡ゝとゝやう哉襲て係ゝ　蕉
素菜壺垂と家の打隅　子
紀ゝ紀すゝと恢恢紀ゝみて　蕉

湖水もしらむ淋四の朝雪　蕉
ゝ次雪のゝゝ蓼のゝゝし　子
俵の蓼哉ゝ哉ゝく蓼る西　蕉
打る花ゝゝ花のゝ蓼のする袋町　蕉
蓼打ゝ出る天神の文　子
寒菊隨筆　芭蕉
ゝゝ蓼ゝ小藤のかゝる臼の湯々
さけてゝゝり打ゝゝ大根　野坡
ゝ人みゝいゝゝ盃掘をゝけ初て
門ゝ魚出ゝ月の美　濃
ゝゝけも秋の日くゝものゝんゝ俳
此一谷ゝ栗の御年貢　坡
七十小蕪ゝ村ゝゝゝ助故打　蕉
ゝ人通りゝゝれゝしゝけ　坡

すしこの豆田の出陸すくえて　蕉
蛭ゝる牛の背　耙やとむる　坡
墓深き寺の男のうろ入　蕉
そ日まもしとる藤の茎　坡
そ一俗る降雪の口伝食　蕉
徒き法とつけて咲き節　坡
田の中まはらせぬ丸れ手ふり　蕉
芝き通ひく有機ある　坡
花の時能文公ゝ丸ゝ　蕉
俵て来うす去の義え　坡
寒庭き去は深と引蔵、
遠ゝるのよ居不　蕉
裏舎を根敷のくる義の春　坡
よむ一の跡の痛む去え　蕉

年ふりて身ハ足枕の道ゝ　坡
法て酒のむ系抱の　蕉
ゝくしと板の風のあなるかと　坡
稲ぬと人の縄義て　蕉
身えきい新ゝ不足れ出来ル　坡
ゝなきて蕗かどとくりやら　蕉
俵ゝるゝあくゝはゝゝ時そ　坡
仕付てそしゝ鎌方の蔵　蕉
田我種ゝ勾ひ迫江の系の出来、
天気ゝふゝ　坡
續猿蓑　　治國
猿ゝれゝもれなる言の拡義ル
田ハ言ゝれと静かる　芭蕉
水かゝ沈の中ゝ夏あて　支考

篠ヤ下まし る 葉といたく 推然
雖 こあ こうろとやうて 紅の月 蕉
通りの ふさ ふこせたる 秋 考
蓋仕 秋 若て 亜ゆう 鶏の 魚 然
色森の 麻 なかれ しうろう 蕉
奪 こ まて ふ もせて 西 考
中国 ようの 状の 古た 右 然
朝日の日 いこ こへ やう 振 れ 蕉
一重 羽 織 う 矣 てたつぬる 考
幸さん し 秋 青 ふの 汚れ 振 風 然
山 門 ある 有 の 月 蕉
神 荒 留 の 人 のかけ ようう 考
水 陸 ひ ある 陸 の 小 鶏 然
見て 通る 紅 三 井 の 花 の 咲 かう 蕉

下ノ五丁

落 ひ と ふ い く 永 き 日 考
ち 風 の み 西 ふ ふ ふ 然
わ こ ま に 豚 を 大 事 か ら 蕉
後 峰 の 内 氏 い 今 家 屋 ら 考
宝 花 の 沙 法 も む さ と ど れ ぬ 然
大 せ つ ふ 日 ろ 二 日 あ ろ 言 れ 後 蕉
雪 こ こ と け し 中 れ と ろ 考
来 る 社 の 系 う ふ う け ふ れ 出 た 記 然
奥 の 世 並 い 迫 年 の 低 蕉
低 ろ も 秀 の や と 社 月 え そ 考
赤 雑 社 を 屋 の 心 面 然
宮 ま ら ぬ 姫 の 右 う ま げ め 蕉
森 汗 の と ま ろ ら 翁 た の 夏 考
多 義 然 法 ら て と ふ 社 の 風 然

大工はうひの裏に古句を芭蕉
采春もくふうして帰る之 考
かく方と市の中を押合ふ 蕉
はあくう紙はなの花のけもふて 然
野のあつくのきぬけぬる 考

俳諧集

いさとを弩引居るうれふ 芭蕉
なうれの敷りふ拓るく水叫 佶圃
者こうれ的ふ居るとさて 馬莧
こ味せんさける拓のを食 蕉
ゆふ方教ふを至食ふて更ふる 圃
食こそくふる秋さむさるく 莧
露しもに 祈ふ物るこ結髪 蕉
黄の葉の義をかさる 圃

力的く肱はそくしふ紀及ひ 莧
絡くふ平蕉もふさ赤絡和 蕉
持佛堂六ふ義に出ふ人 圃
ありさ紙琴て絡ふ雑紙 莧
はくの後十二月の相場ふ 蕉
伏見の接も京の名物 圃
懐へたくさて入ふ夏羽織 莧
親はくくとさふかてゆふ 蕉
方花の音ふ往返ひ垂蕊 圃
陽さたちて俵ふれまう 莧
源水のくくしふる芭風 蕉
門のたふはんふるいと 猿 圃
時の方ふ一村雨のふう通り 莧
流ふう琴笛成出ふ饗ふ 蕉

爲てふおほとそをうかられてこそ　圓
雪の細江のゑもとをうゑ巻く　莧
ゆにはれるゑ　井　龍　蕉
佛殿荒城弁ハ後とも　圓
黒猫の小舟ハ樣のたらみそ　莧
芙蓉の家硯と変に出る　蕉
かま禅の二階城居ちたち　圓
内を陳ふ癖痛ゆさく　蕉
行くゑの一番ゑ留ゑ花ゑ　圓
時ゑ酢ゑくる抽ゑの切形、
秋の空ゑくゑ　莧
奉加帳ゑハ俳めゑ　圓
不云俄ゑ花さくゑ　蕉
田舎の谷ゑふまるゑ　莧

紅葉や水仙の茎ハ枯ハむ
ゑ時も三十日ふ臣をしられる

元禄七年

茎菜ゑ字ゑやいせの和俊
ゑちれくのゑふ寒紙ん桐の海老　杉風
月下ゑ中のゑゑや年ハ宣　孤屋
ゆ松の釈の名てゑる茎部　野坡
養殺や木ゑの旬の拾もの　岱水

年たつや家中の礼ハ星月夜　其角
苔石梅咲たくむ　圓　帝　介我
茎も雪茶ゑの茎ちおとかゑ　岩翠
山ゑうゑゑゑゑゑれの町　樹風
ひとゑゑ只ゑを拾ゑて写ゑ　彫棠

故郷に帰て秋を見る　横山
有明のおもかげ紀行のさたもの　芭蕉
恨をハ合よ永法の夢　仙化

鄙懐帯

此ハ寄よ伝孫の非成ものつれ事　涼葉
ものと雪の写ることぬこと　千川
門番の森敬よりもむ友絵えて　芭蕉
今朝むよ初る篇載の拝　宗波
秋風よ逆とたく裏を浦　此筋
むしも雨ハ風を待ふる　蜀子
孔雀く痕のうと弦下ふし　川
もかふ墨弦付て悔めと　葉
瘡寺の老尼いひう製利　子

奈良ハ津の内ふてあル　蕉
掛ヒたを小袖のうひ弦ふ篇　舒
金の壱廟伝園のあくさ文　川
ヒる度よ源氏一紋の夏いしく　葉
捨てうきせ弦やを紀僧正　彼
出来合も伊せの料理い森指そ　蕉
課足てあるく内屋の砂筋　川
朝有よ花の寄う物せつ紀たて　葉
日新の義のあ伝めたき　勢
石巻む義表の異ふまう伝を　蕉
地取りの様よんるる石苗ヒ　蕉
こく近い庵うぬ康の弦ふし　葉
寺のひうハ四五夏の秋　川
中有よ捷方つ生涯塚の波　左柳

ア[illegible]ゐ蕉を無らんし　軒葉
先達ハ去儀翁の一縄を蕉
葉て居る間よ惟るい子ル筋
うつふきて糸さ歳れ蕉ゐ川
あいれ言もふこと講の歌目　柳
三糸の搭ようう西ハしられ葉
糸屋の二階ハ酒の樓閣蕉
英しれ魚もたよう年ふけて筋
根の文をたくる琴のま川
られ笑ハ又未ての日る懐れ上蕉
言えのまをむ蓋たんは葉
諸雲雀ゆふ日紙しけに鳴うて柳
見ようれはふ[illegible]ふそるうせそ夜葉

農儀集

梅う番ふのつと日の出の出流都　芭蕉
ところしよ雑ふのちたり野坡
家三考き城まのひ遊て去ぬ
かくの俗ようおうる茶の迹蕉
青の内ようしとせ力の雲
義こ物を秋の淋しき坡
郎政へ茶もちハるくちうき
根城かたうう人よ蓋せぬ蕉
糸良通ひはしたうふる細え坡
よういの内のふしぬ古力蕉
乱たる味噌ようふむる雨濃坡
ひさくを出ことふ袋のこと蕉
赤もとうう元の扶病とおこ食坡
ふんこ市くそう行る名力蕉

初てのこゝろみ　坡
蕉を相手とする居合ぬき　蕉
町流のたらりと酔こゝ花の後　坡
門て押ふゝ千もの糸仏　蕉
糸風に糞のいこれと吹出し
なくゝ居るもしに肱こつゝぬ　坡
紅ゆのた右向ひの京を登られて　蕉
こちらもいまとかゝ白城傍ス　坡
方しふ十数の内のかゝの者　蕉
桐の木るゝ方さゆるゝ　坡
門しめてたゝいて麻なる面白さ　蕉
ひゝゝた急て表ゝとる　坡
秋辛よ女房の釈ふる者て　蕉
すこ山まもゝ流ぬ浪人　坡

法師か湯治成おくる花笠　蕉
縄を成下りて青麦の出来　坡
とのゝ所も来のゝに宗とおけ
魚よ飡あく隙の新　炊蕉
千ゝ鳴一声くふゝゝ　坡
未進の言ゝて　用蕉
降ゝも知らせと嫁を連て　坡
屏風のうけよゝ山ある菓子盆　蕉

續猿蓑

八九つゝて雨ふる柳ゝれ　芭蕉
ゝゝりゝさの留ゝゝ　沾圃
初茄る馬ゝもとのゝ　馬莫
内ハとゝにく晩の振　乗　里圃
ゝのゝゝ和ゝゝる月のゝ　沾

拘脊うれて肌をくふる　蕉
淵拂もそそ〳〵の風の吹れう　里
孫う孫う祖父の借衾　蕉
服さ〳〵より〳〵てほしうる孫乃　蕉
蒸餅去よついとや縞の浪　沾
約束の小雪一さん雲に来て　蕉
十里をうの余ふ出りう　里
紙の葉に小路握ておりる紀　沾
あらゆうふかと門の出付　蕉
いつくへう後いはふ紀揚望　里
やりと中出に京の反連　蕉
有明よふくるく花のたてつこそ　蕉
又来よそろ〳〵孫のと〳〵に　沾
春を花〳〵ひ蒸れり俳去　蕉

伊勢の下向よ〳〵何なりと金　里
長持に小奉の仲つるをしと　沾
くつろとそのとれるを　蕉
禪寺ふ一日おとゆ叶上　里
覩の角のことと奴貫　宗　蕉
演出〳〵のはに儀式こうく　蕉
ふ出ぬ晩よいかく行内流　沾
方法又俳茅流のおとひ　蕉
籬の菜の名ふさ　里
むを来て来て栗しえ咲ものむ　沾
俳諧はしを駕のと　蕉
削やうこ長力板の冬の風　里
ようこに宗のこ何れうれる　蕉
引立て安理ふ舞とる人宗　蕉

そつと炭入ふおこして　薫　沾
花はくや殘らぬ雪の吹ちる　見
散うしらの春のはるかける　水　聖

それ越の柳のさいはの志れ一北
主柳の花よ志ばくる浪千北
るさのや蛍の巣つくふ声ぬ濡
乱よ仙女背なも出よ初猿　飛
上飛こそ

四つ五葉の松ハぬ花見んるる
不うられて葉摘もぼくや燃き
うけ花やうくさ柳の及こと

芭蕉

紫陽花や薮ぬ小屋ぬ匂ふ　芭蕉
ようれるあひよ他ろ茶俵　子珊
朝日の朝の子愛ぬ声ゆて　杉風
出雲の相よそうく乱し　桃隣
かんしと有明を見ぬ　八桑
揚揚うけてくくも又来る　蕉
伝ふくて伝ぬることぬ破れ　珊
ちうしと吹浪風の音　風
芙蓉の羽織ぬ世て伝り抜　隣
おさと乱の分たしふ旅　桑
高ひしゆうと内の納りて　蕉
心のうくさる下市の上　珊
草庵のていハ松の気ぬ　風
七日の有も赤と細き乱　隣

秋来ても畑の土はひいられて　桑
そら雀の羽の生へそろへ声　蕉
色うつくしくとなりのやうなる花盛　珊
ひらたい心の高たちそろう　風
西方のそろふ飛脚の人雇　鶏
浩たる俵とそろえる取　桑
豆の酒麻とうり酸のぱうて　蕉
五ッうふれい帰る女房　珊
此係も利上げはうりに近し　風
まんまと今朝は鞆と素出　鶏
結構なさうれを汁ふ切入て　桑
乙世ようり奥ゑ家ハ引とき　蕉
そうとけて今年ひとそろ盆れ方　珊
まとそろもそろ蕎麦の迷ふ時　風

笑栗は素ふとうもとうと漆ふて　隣
風うらまさうふなものつ人　桑
いそうまうう一日はいて供仕度　蕉
糞くむ匂ひ隣さうあり　珊
今のうるふそろうふ徒ふ時雨　風
日雇の五番残義ふ元迄　桑
扈従庵所茶屋の紙ふ元　隣
小糸城まそろ花の山元　華

俳懐帯

（此之若日之所代表勢を後人
意従すべき日氏ゑまます）

篠の雫待ふかそ義りこう　義蕉
牡丹のそれを絵む度　惕　千川
みしうあも方ふあうあ乱して　京桑
堅ふ立て垂　琵琶と狩ふ　左柳

雪より八葉ふむ馬の冬ごもり　川
出てとしゝかの年ふるの　砌　蕉
吹なくこと枝も絶ぬとゝの社　柵
いつも茶屋よりおくる湯の泉　葉
大のみれ歩きもれぬほど旅肥て　青山
稲をう田成借りふうそやれ　川
義仲を書用寺れ夕法とめ　蕉
瀬のひゝさうのぼる方代　山
生おうの鮒ハ鈴ハ鈴ハ他られて　葉
養ゑ出来せいきつ是しく　柵
順礼の帰りて様の始うう　川
是しうたんゑ供しへ脇さし　蕉
花ゑんをふをもる魚の陰ちう　山
乳へい抜ようさる　髪　葉

髪ふる騒欲の寒戦意深の　蕉
もゝまふらへなる行器の給　此餅
陽よりの浴衣干るを結髪　葉
窓の破を入るく小風　柵
さんーさふとゝみ殿せいもも来す　餅
雪のまう紀い行時のやま　遊子
萩畠年貢の柴に苅そへて　川
酒屋の門をたゝく月の扶　葉
人足の貫同引あゝこざつゝみ　大舟
囲をとれまてて笠をつゝせ　蕉
義と日ころおもひ〻死不　糸
作り出を西よさとく隠蓑　鈴
隨分のこゝろ矢立を結ひて　柵
大ふかくやきこ〻の金物　舟

僧肉よりうら洛川ちうに浪花声　葉
咲しこそれて休む茅　原川
武蔵いつよりうら記花のうけ　蕉
姓のたのつんもる苗代　糸
鄙懐帝

俳別

風流のさと城時やれ〳〵さん　凉葉
旅のさらちふ卯の花の雪　芭蕉
鮫川よりうら丸釜の頃さて　青山
門遠へさこる聲者れ蒸掛さ　魯良
力の抜いつんれぬたも静し　濁子
れ記西瓜も今い涼しさ　嵐蘭
庫裡焼のさ城未なる盆中　岱水
なるを一つとのそ山六尺　曲翠

三ツ屋よりうん人もさしむ寒うて　嵐雪
んもあるそれ侘名よ名を出　葉
れ地と屋さてく新城かし合　蕉
本貸とまうい不純をにる　如誰
入新も田そ記言地の朝竹　良
捨を前山てやうそ記人　山
蹲よ隣い白城掘出しぬ　春
小鯛の文城送る村し　子
この花よ刈官殿もらめけん　蘭
寺のくれ末城おうに雪水　岱
入物も田掘の似せて井記　葉
捨るを寄はけへ食城　雪
長うぬ髪人冬の寄り不　山
さと年くられて居白記　蕉

火桶とらう森ぬ我が友に語り　子
蕎麦の粉ふるへ明日根迦　蘭
五さう手ぬとは紙にくいて捨ぬらん　雪
おどけさ面は名の是よき　桒
落ちよ風呂に付る傍坊作　岱
それつ月和りし秋の夕暮　良
拂ふ世の事をつへ見たる後の方　蕉
稲荊つまて小糸宗近　山
拘の屋房さけゝえ雄の童　雪
雁氷の宮よ残る足跡　蘭
引渡さられ中りと屋ゆれて　桒
撰蛭垂しに酒盛られ久　岱
やよ千待て初中にて送る花に暮　子
菓をくへ鳥の人よ快きる　良
下ゝ院

小文庫

餞別

新麦はわざとすゝめぬ首途かな　山店
まろね蚊屋の覚ゆるらん　芭蕉
馬場の邑淋しき牧の野ふ　、
四五千石の松のたてやま　店
方しへ医者我引とる薬かな　、
そとりの佛法たまも覚えれ　蕉
盆色のこうら寺れ着候して　、
ほしいるものよ亀我やうつく　店
蓍生に慈我やめたる男風俗　蕉
湿のふさ出のり当れ南気　店
丹波りし便もふくて鳴く鳥　蕉
節季うちかれさ利上さへせぬ　店

雪に出て土器うりに逝ける　蕉
なる京中ふなそこえくら　店
俳諧のいとなみとして物ぶる　蕉
嵯峨こしの中やんて乱れ咲ける　店
奥の院とのもしの花さは　蕉
今新うしいくいの雪の明く　店
去の日に蕉屋の仏のつくりと　丶
かくるしや湯浅食らん　蕉
いそうしいくれ股を残る並　店
月はらもとうに寒ふるし　蕉
手しいくる櫛こやしはうられて　店
俳諧の本地をはむ糸たて　蕉
こうしこと白挽出せいはくれ　店
そくろに茶のもゆる夕　探　蕉

羽二重の赤ちゃんに抱かれひ　店
若い時しゅうしゅうすすすする　蕉
雑炊すこ盗まれ今朝寒　店
畠いあれて山久雪のこれ　蕉
日光へ行らうやを秋のころ　店
くれくれたのひ才の　事　蕉
ひ風よ蒲生の家も荒れり丶
物よせこやとこころ入用　店
花のかろる中に杜山とふらつれて丶
蒸暑の日　ふ黒雲のもち　蕉

雲雀　年二殺こ老と　嘯

[illegible]

五月雨より降の降るを[illegible]

[illegible]

[illegible]こそ[illegible]麦の色や宿の内　利角

麦畑や出ぬけてもふる雨中　野坡

浦こせやもむしろ縄のこれを係　岱水

武蔵を出て故郷を恋く

川崎をくるくるにおくられて

麦の穂をたらりたつのむる邪

殘行はやく紀橋と菜のふなひ

[illegible]田塚本氏にて

五月雨の[illegible]吹[illegible]せ大井川

夏は月[illegible]由うら出て赤坂や

[illegible]

曠日記

[illegible]川[illegible]山[illegible]氏

水[illegible]と人のいへるを伝屋[illegible]　芭蕉

苗の[illegible]をふへなけ　巴露川

朝日よむ[illegible]合羽を吹れて　素覽

追[illegible]の[illegible]へ[illegible]る生もの　蕉

[illegible]やよる暗[illegible]方の秋　川

くこ[illegible]て[illegible]る[illegible]の[illegible]　覽

耕作の[illegible]しる初[illegible]　蕉

[illegible]ふこ信濃街道　川

[illegible]の孫[illegible]ごもー泊[illegible]　覽

[illegible]の降る日城出発小雨[illegible]　蕉

[illegible]の縞[illegible]むる蠅の足　川

蘭城苔あけて門[illegible]　覽

ころ声てあちこちちらし寝覚 蕉
風鈴の宮の作こと名 川
うたゝ寝の夢ふ打ふ扇はなけ 覧
禿まつふくろ萩の箸の縁 蕉
咲花に二腰さゝむ無足人 川
打ひらいたる白へけし畑 覧
山ここと科の御場を除て 支考
秋の月虫は昔日よ判 左次
方秋まておとこしよ紀盆の際 巳志
叩りもきめの風幾漬こ亡 川
三施の乞佛にうつる秋の風 覧
一行をよけて
便代よせて門よたくさも 考
我ない貴ふて寡する山もなし 次
筆越の秋のこゝにうり寿 文
下戸主

さていは下戸いふことのやくに立ず 川
達者自慢の先よされさ 覧
金剛の一世の時のうれさう 考
除し小木瓜の照らする氣 次
春の野くやたらに庵お向行客 文
三俵つけて馬の 鞍 青 川
それしふ男女も絶そろへ 覧
よめらぬ先はむとめ柔宮 考
有明よ白髪もかいろ秋の夜 次
要もふほへ椎つ松茸 紀

雅水の宗居に思ひ立ちて
もてしこへさゝ国にてもろ侘居哉

砂川集

蓋柿舎に異

年流と村のさとを五月雨　讃岐

青葉ふかき切梅雨の花　玄来

一枝のしらに重なりて　芭蕉

柄もこゝつもなき脈　指　惟然

月新し芭の海亂の下ろく　尤州

提下りてい田の中の道　支考

家しいふよ井戸の間そ　来

住ふ月よ十五重あり　竹

秋もやゝ今朝うゑ紀給ひけ　然

雁ふり鶏のこやゝ来てみる　野明

拖迄て松ふいろ紀有ぬよ　考

あゝ人をよ奥ゑ紀ゐり　蕉

下ろく

雨乞の志ふり船へ紀情ふ紀て　州

行芋をゝゝ紀ふ掃箒のふ　然

極楽てよ紀居不紀たのゝや　竹

吾ゝとなゝうゑ紀世経ゝく　来

道もふゝ畑の祖の花さかり　州

寺百姓紀の出水ゝ下ふうゝ露　考

（三川舟の渡）

撫松の出水ゝ下ふうゝ露　明

塔よのはうて消ふ白ゝ　然

賣よ半ふ筍掘てゝむゝ人　若

菜ぬの雨のゝいふゝふ　竹

この頃の上下の流の庶ふ　来

脇よ越さを雨め音　遠　蕉

菜ふゝふ夕庶の形ゝゝ　然

ちゝふ多のゝふ初ふり　明

朝の有記くたること五六ゆく　行
ふるふるしまの嘉祝しめ　来
蓮生のふもとうけつく伏見紅　蕉
かけんをせる泥渡の捕　然
生来て来る青ゝ不深乳に入て　明
行秋けり笑ふ製　結　行
吸あて発歳の客祝立せろう　来
肥後の相場祝又なてこん　進
幾口も花ゝの連ささそられて　然
曰くせるふりし春の風　明
市の菴　芭蕉
柳骨折斤若ハをし紅赤瓜
宮引捨ふる道中の得　洒堂
ゆく雀里ふり宮ゑ生ゆ花て　去来

海うけ波をとゑ前石こうれ　支考
有ゆるいろふく赤紅の端　文仲
小鯛うれてそゑ恋り付　素牛
上祝芝てそゑ伏後ゝ蓋素　堂
ゑ捕を入ろく先通りの紙　蕉
瘧ゑも食いつものくれて　来
大ユの軒ゝ弧祝備る　考
仲戸樋の水設うる庫裡の先　牛
たゝうを待て硯涌利を寄　堂
ふゝ生もめをろく雨のちゝと　草
悲ゝ止ゑちゝるせんそく　来
歩艶を蹴し鈴と両方ゑ　堂
寒ゝてうゝと握の赤の森　牛
有花ゑふゝ門とおつ入り　蕉

巣おろを地の登る掃板堂
陽光に眠るまつ丸る遠あの供華
我業の香の淵のほつとしてある蕉
行にの淵りとう何と指出して壁
迎とたのむ明日のおれ掃来
うを雪の一たん庭にうる浚り考
御前いちんと浚の田楽蕉
遥ゑの細を嵐のなるに吉堂
儀の明屋あるし次なり牛
菜乳の跡て経濃む遥公坊来
を掛捉ておろに牛の考
川に流うて京をれあり明る蕉
岩よのせたる田上の唐竹
正月もいまれい淋し北日る堂

下八十四

雑漬よ来ゑとの名代乗
咲られよ行ゑ彼を縄牛
彼岸桜うけてお陸海く草
ふ粉をぬ主ゑ下沈ゑ良巻
役者をやうの衣の薫来

礪波山集

誉ふ朝日さにあり井梧子 浪化
乳者うにらゑ蒔ゑ去来
やふ入の土産似合ふこらて
又明のうるあるうるる空化
巨燵切ゑさも通ゑ方
ひろひふ城丸ゑ借る来
猫人ゑ銭を買る田舎道
かひゑの臭ゑ六方の末化

京たる個紙一こいろいちらし、
小屋ぶらふ塚の裏町　来
云今のちら〳〵と乱る風遣す、
梅咲そめて名花こやしを　化
年中城杜の内こう特産くひ、
伊勢の此日いろ〳〵紀美　来
上絣の未綿合羽に傘にて、
浸屋の手遣いハツ下りふり　化
名月のもや〳〵ふかく〳〵あひ、
一分でもおこと乗ぶし切物　西蕉
玉味噌の伝濃よ好る秋の風、
不見ふ寺紙を陸よ持とる　夾
右のまれふるひ沈者に陸うく、
煮こうけてやる相役の　化

此者城をめひて遠る船の難、
青田うゝてうゑのうせ　蕉
平めふるふ城蒼る山水場、
給仕をさせて馬まう食う　来
方〳〵紀表の怪柄を星てる、
聖灵棚ハよのほと　紀　屈　化
三のふ宮城通よ出ると思せて、
来てくからうた去年の後業　来
条宮こいへい盗もりこうう　化
ふりと新日れむり人接き　蕉
蓋をたる松ふうの笑ことはれ　来
四五人通る信本宗ふり　化
薪を町のまとものの磐古能　蕉
いつも芸ふ志紀世の中　緑

翁ふるさとに入れてすゝし瓜の泥
六月や峰まで来たる月の山　芭蕉
清流や底ふきとおす青松葉

鳥之道

本節庵にて

秋ちかくそろはれぬる弓哭き
三ゝろふふせる捉まれたる　木節
月ぬすむ板ふるの火紙すさて　惟然
紙ゝく澤に下る白鷺　支考
降てもまろ丸雪ゝそれの去り　節
まひ〳〵ふいて粉細てとる　蕉
夕飯を喰いて儘の脂とゆ　考

行の瓶ともふれぬ大根さ　然
有して粥のかゝる宣花さと　蕉
うゝし發のせくるひゝゝ蔡　節
俳徊の陰ゝ方のさゝむり　然
梁こゝゝの落る秋風　考
八朔の礼ふそゝ仕舞ゝ　節
舟長の鯖の時ふゝつふく　蕉
西美濃ふ地早ふゝれ出る　考
竹ゝりゝとゝる遠青竹屋　然
結うけて細縄足らぬ花の垣　節
足袋ぬいて干ぬ夏の涼　考
年礼ゝ水さ紀やつる供さて　蕉
伝すたゝうとゝ立ふゝゝ　節
切焼の上ゝう出うれ額つゝ　然

葉こよ長笹とこうさうとおく　蕉
水蘇は四面に雨垂るやうに　考
井の根絞りあのさうし　然
さうしと京への枇杷を若の蓮　節
嫁と娘よりこるに絞こく　考
客いられさむこと茶の巨燈の皆　蕉
亜ことをふうるあさうにあり　節
饗結て番に出る日の朝月抜　然
木に十ヨそうう挿絞たーるむ　蕉
滿俺を中稲仕あけて食茶り　考
桶もからもも切たが　然
投うちをうけまて猫の迫あり紀　雄
首に拭をうふる接除を　考
花美て茶つこはしめる裏汁山　然

ぢくしの肥る赤土の岸　然

續猿蓑

夏の夜平岡を出て明るー冷ーあ　芭蕉
蓮いとらと蓮の根を　曲翠
雪いつその後に青波入ー　卧高
古紀華　紀に反古ー　椎然
月紀の雪もちりよるやうに　支考
赤ーふて残る雪る紀　蕉
鶴とうう場のかー迫ふし　翠
山ふふふの名と出を　高
鉢撓ふる面捕ふとむ茶　然
鳶て立文とふる賜の降り　考
おのう事ふうに漬ふく接ぬ番　蕉
お佛の紀に夕日ふー迫　翠

平畦に菜蔬蒔おきし跡　考
秋風に立たる門の居風呂　然
馬牽て綬ハひそむる方の紋　高
尾張で付しもとの名に成る　蕉
餅好のことし此花もあらハれて　翠
正月ものゝ襟もよごさず　高
春風に普請のたもりいさすく　然
薮かげの村へぬけるうら道　考
食かはぬ聾も婿も口利て　蕉
何その時ハ山伏になる　翠
笹芭を捨に附たるもさき箱　高
蕨こゝろる行肩雖いと梟　蕉
お霜と紀気に立つ矢来の町　考
隣の日和に雪の氣遣ひ　然

呑ごろをとせぬ酒の引濡し　翠
着かへの分を舩へあつくる　高
封付し文箱来たる方の書　蕉
そろそろ歩行く盆の上臈衆　考
燈籠流る四条の角の河原町　然
高瀬をあぐる表　差　周　翠
今のまに雛をつくらふ縫箔の上　喜
大きな鐘のどんに鳴ゆる　然
さうぶふる花つくも扉おし上て　考
腰かけつみし藪楸の下　高

壽芝が庭の松を描るに

涼しさやすぐに野松の枝の形

ひやひやと壁をふまへて昼寝哉

七夕や秋を定るけしのあ

金令

家ハこれ杖よ白髪のうら葉

いふつるや園の方ゆく五位声

壬生山家

翠蓮

ふゝと笹杖もつく板の毒邦

井のもつれと初あらし吹　惟然

朝方よ鶏さゝへ尾をふりて　土芳

きられいころ柘植豆腐うれ切　雪芝

大八の通るうぬるさゝ小路　猿雖

所去の新よ編笠も見ぬ　芭蕉

乗るうゝ水仙ひらく川おもて　泉袋

壁中へ半を縁日どき寄ゝ　九節

嫁入の来て縁うれ門まろ　芝

杖と笠屐を釣りて　亜翠

一ゝゝゝ雲を立ち方新然

鶏鳴るあり孫金の浦　雖

大島のゝゝうて四も畑も　蕉

蕎麦粥とふるゝ惟るれ汗　袋

立ふうゝゝ出とれくゝ世れ鶏　雖

機抜まうて祖母の法うく　蕉

うん丸よ花の本法の一かゝく　芽

とこやゝ宝ゝ紀まれ小　風雖

桜花屋にを荷ゝ呼ハ出玄　芝

ふうひのゝうゝ紀よ浅蓼ゝ侍　袋

冬うれの九年母れ一むを歳ひ　蕉

たまゝこうれハ居風長ゝ漏　芝

持徒の一ちゑにそうろう　翠
あたう法こうこれつうたる　芳
言のに入こうこれたる道具市　節
葉のはこころこうのぬうれいふ灌　然
ちうあれいみこうこうある後世の　雛
ともに年ようたるあふさうの扶　蕉
有明よ志はしてとて馬と雪　袋
雪時雨ようう頭痛やこたう　節
引たそ留ちふしてを無花門　芳
入とりたよこうにそこ畑古井　芝
ふうしとさせられる貝殻ら　雛
いこのこさられたくく朝風　然
さもしとそれの彼る大よそ　翠
柳にもしる土よのうろ　松　袋

猿雖亭

はいしこと来ハ海り壁多り　猿雖
雀のかしらとあるる雪の　穂　芭蕉
朝方赤駕ふやうやく近付て　乱方
茶のうたい暖屋のひよ　望翠
かつたりと拐とおろし雑水取　士芳
霧屋さうに待居る　卓袋
燈屋のふされよりやて　蕉
名主と地下と立こうる利　雖
焼飯を刻ても中の冷たさい　翠
れもハ霧さ出ぬうりり　芳
名花ハ扇の要仕ふらへし　袋
湖水の面方枝えうれ　若葉
脇うのふ屋の表を城おうり

角力よ夏こいとともはし　雖
山陰ハ山伏村の一うまえ　蕉
くつれうつうつ　新の時の果　袋
熟そうこ栄うふり　屋の花　芽
土かたこうれえ　の風　ち　蕉
坪うの川除の石垣上ケて　翠
日ろうしに風うあ人　蘿
大ゑの供の長さの果もえ　力
むうひの凰のおうう血れ道　雖
一弁ハ代をもてまぬ酒の粕　蕉
たらひの麦ふ蓋うとまる　是
燈よ葉　左　畑立の板ハ交て　芽
融の事の概もとのを　力
をくうくいとのぬふまて義ゑ　蕉

下ノ全

干かとひらのしゝ　をる三ゥ方　雖
神主、和、供とおて上らる　翠
三ゥゥく岑よ休む氏土　帝
底ゑて接をるゥ　ゥ　蕉
加ゑ〳〵いる冢の子ハ　芳
耳多時ゑうる戸ハ接ゑ　雖
月義のゥうこと雁ひ六文　翠
大ゥうふ几巾巻のくゑ乾の張　力
茶の洞るのたるむ　二　方　蘿

雪芝
残る板よ捨ゑて苔ゥ苔ゑ
餅春ふうゥにえとる波　雖　色蕉
巾ハ方よひる接ハ実よめて　土芽
うを材ゑよ笑る鶏　飯　風蕉

夕とそいめ二人つゝ立在ら玄虎
こふちうけ垂ゝ苔の間かの苔蘚
燥豈弦月利の内より行たて蕉
行うて考しとき門の鶯口芝
大木の梢い枝のちくむふり麦
聖こゝ麦とゝしてとうた儀拙芳
山徒よ絶ふつこ来て礼配る蘇
一里りても石をとる猿虎
かけあの布袋の点方うして芝
石の条よりうしを帰蕉
秋うせの雨ふうしと川の上芳
歩り苔い松とゝう上るく麦
夜侯出おらた花の咲そうひ虎
とても利ふう麦の頌礼藤

七月の西よ朱なる切目猿樵
あ流よめるゝ雨のまゝ響芝
のこれぬや余ふうゝ来ぬ冬ぬて麦
染たく侯ふ拙ゝ教とう芳
寒井の枝の節よむ老のゝ藤
さゝぬ山路とゝるゝやゝの世て虎
言るゝゝ寺就ゝ逸の高枕芝
をく花の侯ゝをとるくゝ拙蕉
ひけふをや方ふ拙ゝくゝれ芳
裝色のいくれと侯う牛猿麦
おもい切ゝ添ゝうふゝゝ乱けて虎
白ひとゝ紙志よはゝひとおく藤

玄方の花ゝうしゝゝゝゝてゝゝ留

名月よふもとの方や田ぶり
ちゝ寄られぬ世よく月も十六里

斗後又山ふかくなられて

若き麦ハまくに花てもてれて山路哉
山産のことやして巧 雲の稲 斗後

俳諧集

松茸やこゝぬ木ぬ木の入りうつる 蕉
秋の日 和ハ雲とかとすゝる 文代
秋の日 行原の道を中往よ 支考
きくしいらけて郷のうり家 雪芝
四五人て寄ふ紙志ゝふ紙を 猿雖
いとうし弱よ雑炊墨ゝ 望翠
今朝の雪ハ氏ハうもたつうと 惟然

下ノ八十三

屏風たくんて脇をせるうゝ 卓堂
ゆくしよ上加茶のうゝさゝ 代
ゆゆの流ゝそうの合さる 考
蒲ゆ蒲空のうゝの乳束るく 芝
田よゆうゝる八ゆの 雖
いとうし紙ゝもて入と変孤 翠
三年立てと咲よみのかさ 蕉
庭ゆの白ゝさい人よ立らせう 袋
鼎ゝも果ぬ佛あうたく 荻
初空の恒のふる井結うた 然
通ゝかゝうぬ方の船ゝ 代
ゆうしゝ紙ゝたかの俳されて 衆
桑う谷ゝも立腐ゆいり 考
年切のゆゝさい紙よ角とへ 雖

居風呂の湯のうめ加へ入れ　子
二三本一切りたゝかれ　考
雲安の焼茄子　蕉
酢かけて松茸の香の深雖
花さつゝじ　附一句　仙　芋
味噌賣の白髪しに等後て　代
本路紙盆　ほとゝぎす　袋
あり明の本家の秋と麝香猫　蕉
流る畑よりさる蔦一本　子
この秋は腹の脱とわつゝひて　義
侍と俗との発の釜ふり　蕉
啊るほどよう焚付ぬ竈の下　芝
芝切入て馬屋蒼けり　考
それさむを行但山のいとゝ雖

芋の日向よりの屋のまつゝを　代

俳諧集

秋の秋城うち篇ーたる嵐哉　芭蕉

方中ほどいい蒲堂身に竈　車庸
西の己二とれ三弦雁鳴て　洒堂
ひうひる牛のよく動くゝ　游刀
男の名まんまと呼ゝ志性者　諷竹
小油紙出して麻たる大とし　惟敬
使ひるをとるとおつとれ　支考
うても医者の足薬ふゝ　蕉
拭ひ立恵しの拭きらしと　庸
考て掃ひる弁尚の　挑堂
紙より思答うけて蒼かり　刀
すきそのるくれ肥ハるる　考

廉のとぬ抜ハ若葉の百れ損　然
西幸の有よ細よ川谷庸
大蛇して薬師を下る雅の嶺　蕉
七稔まてハよろつ隆かき力
えせ馬の背鞍の苗花やうれ　堂
小屋形るゝ如金枝の春　然
密耕〳〵色
松風よ新酒をさゝれ赤を郭　支考
方もうとふく石垣の上　猿雖
町の角迫るく蕨の花ゝえて　色蕉
きてハ活衣の裾を引もる　雪芝
世月ゝもおほえをふけうと　惟然
武ふこうてはしゝを後ゝ　皇袋
蘇相ふる菜屋の風い切かゝり　望翠

家て天宗弦ゝ刺　考
為比を備しは間の稽をえた推て　雖
唱花の中城毛程よ引のけ　芝
仕合と矣指の糸と家ふんさ　蕉
あゝけと候の焼れられつゝ　翠
せうしと活るを羅ふ花をて　袋
大工家根屋の帰るられと　然
用のある時いうけ巡義ふり　考
雨の降る日の節匂ゆるやう　芝
さハ墨弦亜連ゝてもれる色　袋
親ゝらゝ字をもゝて歳　秋　考
為新よ又ゝう返すせめ念仏　翠
借りたふゝんの跡の冷やう　雖
咲花よ海年ゝふを連詩　然

陽炎うけてたゝる振けく　袋
幸と猟のはしめに雑るうちて　芝
内侍の笛を聞るたゆいるし　考
遥物の門のうしろにたくさに　雖
一星の舟も脱のすきたる　翠
山ゝをゝ窓掛の色の黄にあらて　蕉
所ふれてかゝる角の高　考
毋才に離をて角のもれ淋し　芝
蒐の絵る巻　巻菓の中　袋
傍峯の鬢を結ひ上げ徹の雨　雖
さゝふ出をにと消ハ淋々　芝
小舎とハむうひ合せの下れ冥　然
生爻の風ゝ人孔こうあ　考
水奥を千日寺の鶏鳴て　蕉

歯うけ足弱の雪ふ埋れる　雖
やうゝに今ハ海ゝるあ留　翠
加減のくゝりうちゝと飛　蕉
濡紙をもらけてとれなきたゝみ　考
こはれて生る新の蛍けし　袋
朝ゆふの茶湯ゝるとゝの業　雖
何ハ況生ゝ生のにやにく　芝
拓もせをふゝるともふれ補の校　袋
力えよいつも造化せゝる　考
雪もゆゝしとする秋の風　翠
淡の小家ををゝる寄　然
懐ようゝ出くゝけ狀　袋
いそゝきの爾ゝ白玉鬢書る　考
雪傾の窗ゝうのゝく花の枝　雖

根岳法とひよ雪のふく　芝

小秋やを伐ひろけふる栗のいろ

ふうそ

菊の香やふしよりよハ古記傳逆

ひいと吹風ゝ悲し萩の蘂

そゝかり洛

菓の番よりもり吹ら節白部

菓よ出てゑゝとふそ蕊方抜

芭蕉

舞　雲てふ列かゝる方えうれ

秋のあらしに奥ゑつれを　畦止

家のある野ハ刈跡花咲て　惟然

下八七

いたもの瀟よこのむ中服　洒堂

ゆゝろふりて土用とらしゐ　支考

援の枝とおろしるたゝ　之道

溝川よたけおく登伐引てる　青流

火のとぼりたる亭れつれあけ　蕉

其使

所思

此道やり人ふしに秋の雲　芭蕉

畑の畠の末よかくる　蔦　泥足

方ちゝむ蕎麦ゝ　ふゝ様て　支考

小ゝ紅ゝを出て　ゑ　汲　俳力

天竜お羽織と入て若接ゝ　之道

酒て痛のとまる服くせ　車庸

かたたゝ節白ゝ　洒堂

[illegible]の霞ひゝ赤き梅咲る　畦止
線香もえの[illegible]の仏[illegible]る　惟然
[illegible]比須の[illegible]の秋[illegible]る二方　亀柳
[illegible]の者[illegible]ら我いはねふるれす　足
かゝ[illegible]草にさ[illegible]る松風　蕉
[illegible]と[illegible]の稲ハ[illegible]れて　庸
地[illegible]の埋る秋ハふるし[illegible]　考
仕[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]の方　道
鹽[illegible]の[illegible]の[illegible]と入り込　然
[illegible]る花[illegible]幕の芝引[illegible]て　止
[illegible]侍日[illegible]医者の[illegible]　堂

[illegible]

秋中[illegible]

[illegible]

[illegible]風の[illegible]て秋[illegible]

[illegible]

園女亭　芭蕉

[illegible]の[illegible]の[illegible]て[illegible]　園女
[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]れ[illegible]方　諷竹
冷[illegible]朝の[illegible]て　渭川
[illegible]せ[illegible]ハられ[illegible]　支考
小[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]　惟然
[illegible]て[illegible]の[illegible]　海堂
[illegible]ふ小張[illegible]る　舎羅
紬ふ[illegible]の名代　何中
[illegible]紙[illegible]

晉清の内ハ小屋て大成葵　蕉
帰らぬよ極まる蛍の尻めを追　園
酒買ふて飯早稲の搗紅　竹
られしと力の出うる秋の夜　川
秋淡引たる町宿の秋　考
られたやう淡うら遠ちはる蛍　然
彼岸のぬくさとられてかさう　堂
青芝に対まもへそつふられの花　蕉
出代り時のまを歩たしふむ　中
通ひ法を授ふるゝねい迄入　竹
去ふるにおかす奥の庵　挑川
あさしとをうをくれた主の堂　堂
雪のくしのふるふる風　園
紫壹よ隣のるるも連れて世　考

清　蕉
上下の移れる川の青　中
うる田の中を離れのさたく　蕉
小ぶすくよ不沙を粧くおふう　園
絡の仕出しのくやう宇機　堂
力氣も考く作を汗の赤さ　竹
杖考本を通の脚さし　中
世ふ江のそれも紙のはらされて　蕉
老のちふに姫ほしこのる　川
條ちまる渦のはうれ張さ　考
ふくうぬ夏の積でこのさ氣　園
田のあの注連ふるる花蟹　堂
柳のふゝ木ふふのひり　然

人事やいとなむこゝろ秋の風
秋もなをやさしくつく雨に月の形　去来

花屋のくらつき

張よこ病て夏いかれ花をかけろ

菊の病ゐ残すて活ける
出る舟中

舟よ揺て菊物のゐやを乾　去来

舟中

白粥のなかうをゐやを乾

行徳

木枯のそらふかをや鶴鳴

ゐつさやかしらゆ水して弁慶　木節

起さるく声もうれ紅湯婆　支考

みぞれよやそてをりん佐をぬ　正秀

下九

外かるゐたのこちうゐ松のうせ　之道

味こゝ鴨のさ外りゐ佐をけ　丈草

日をうしてこまれこゐ菊の素　乙州

まちに竹の林やこゝてさくい　惟然

法華ゐ鶴を拓ろん時ゐ者　長虎

舟中

うつくゆる業の下れをこれ　丈草

きこうれて次のゐへ出ををを　支考

追加

公翁脇句

○[illegible]雪ぬ[illegible]の[illegible]うれ　胡蝶

一つのね[illegible]ゆ[illegible]

○我さく〳〵軟さく枇杷の[illegible]　秋風

[illegible]ようく山　[illegible]の花

○月花を両のなもとのさ[illegible]　露沾

蛙のこゑ[illegible]入る声

○[illegible]　曾良

[illegible]の[illegible]やめ[illegible]

○[illegible]の虹[illegible]塚鳴山の雪　會覺

秋の[illegible]りとこの[illegible]三日月

○こせ[illegible]枇杷[illegible]の畑　惟然

[illegible]の[illegible]

秋の[illegible]の[illegible]　木因

萩[illegible]森[illegible]

○芽[illegible]ふ[illegible]柿[illegible]実　丈草

[illegible]の[illegible]の花

○いろ〳〵の名も[illegible]　[illegible]頃

[illegible]れて[illegible]の[illegible]

○[illegible]　知足

[illegible]の[illegible]の花

○[illegible]の[illegible]　雪芝

[illegible]

○芭蕉[illegible]句[illegible]　李下

[illegible]

○[illegible]　雷板

[illegible]と[illegible]風の破[illegible]

○花の咲く身から今の寐られ 秋うしほそく蝶のくたびれ 勝延

○冰のさくて青拾りん木葉ふれ 篤よ霜の鼯に十一 嗒山

○やゝうれ焚よ合しと秋の綻 田植とくも小猿の朝起 露川

○我もさよ梅より実れ最つきれ 茶の湯よのころ雪れひより 雅良

○雨のときさ蕗ねぶ皈や旅寝せず 古人らやうの秋のころらし 如行

旅程二尺むしろの端や夕涼 すゞる氷ゆくいのちさきの花 曲翠

○寒さ生来の襟もかりや生大根 是をし蕗る小窓の蝶 許六

丁々舎主

○春風や麦の中ゆく水のおと 木導

かけろふいさむ花のいと口

○きるへしてさせてや早田植唄 巳百

をゆるゝためん不破の五月雨

○ねく庭もふくてちる木の梢 露川

小春よ首のうこくこのむし

○時雨てや花まで残る枯芒 園女

常ふさらふ我とむろつる艸

翁年三

。掛たこんて日永し　樵今三日　湖春

糸のこゑ　の　素　つ　く　蕉

巣の中ふ蓋のこほの並ひて

。雨くれて栗の花さく　桃雪

いつれのそに鳴る蟬　等躬

夕鉤うへ物ふ面よ有出て

。蓑やう拔へふらひ草　詩躬

市のつゝみくものそたる布　胃良

月表こゝを城ふらつる涼にて

。長原さゝ寄ふも三ヶ一　利牛

うちくしやく紙の利うら　岱水

蓑ふたつ冬菜のはゝ切蛇て

。花のかけうゝ花ちてしや　荷兮

下ノ本

折て中掛人屋のはくきく　落柿

七夕の八日いもとくしくて

。年ゝすれ蓋よもれの花さん　洒堂

孫ゝの世たる琵琶の木　拓　素堂

青の方うゝ掛ふ人ゝ宥りて

。松拔ふすゝひあけたる夜　去來

後れ引ふ寒ふ渡るたそこれ　許六

ひゝをゝに孫ふる拔去ハ丁る風呂

。蓋ちや系敬さゝて一流

二人ゝていさゝ大ふる　凡

數物の麻のそれゝこゝて

こらめる
もしとの花の枝や茶臼山　城書
肌寒しとして　もり長　秋の立
秋いまのこゝろ　句ゆゑ　麿奇
ほうらく笑にたまれとや　青
かくはうの人の高徳　冊園
くへも一日　蟬の形く　推青
有あらと五葉往出る家童子　園
老いくふし十会とせり　青
水仙のさうとうとうとる神会方　園
松蛇ゆうく常盤ふりり　青
登られぬ大内山の后の孫　園
西ゝらしと郭ゝ　青
あらそはる風はまくる川波の　園

下ノ平四

姑人てさ一西りいう　青
秋ゆてい畑より他るしろ茄子　園
花大とはして星条く　青
候妹と横の中うち社の方　園
狐の寸りく足もも根く
奥筧寺と云ハを名も醒ル　青
府ま賣ゆて雪る白　雨園
れ袋の新屋に地ゆるゝ竹　青
沙石と漬てよを不可思議　園
精進とうハい迎さん煙を　青
都ゆゆてうるる江戸の丹　園
三ッ踊く山老の酒も志賀く助　青
ゆくけゝと戸を却く風呂　園
布袋く弥勒其のヒ　青

興のうしなはいとい三十六首 國

仙人よ来る事もうれしの石 青

その京しいとなれ本城苅 圃

ひらまれのうれのてきとの柳かけ

山川ちえしらに人こそ人 書

みちのくれよりのろもこそあれ 圃

かく拔し世と進いろ人 亥 清

花も名よふるこん加茂を歩 風

雜こ〜色ちうる砂の松 華

松浪獨吟

松のこれ自花見ふ来る序る紅 翁

物子の添ひ紅てり陳

九月日のちうしようつうへて

方行これい後の蘭たり

襲い唯あるうすれ叫紅葉

世をて楽山子を居一実寺

ころ〜もや庭の陽めるく紅ら

霜ふうけ出の後ふろを

一備ふうくいふのらけ森の中

との町〜て清るはたりを

きしよ乳の、〜弟のけいや

名もふき川と本直流れて

つれて接をも麻ふと石の声

方よ思ひとをいとへ面ふう

かくゆそのぬい君のれやすう

仏のみいろく茅 垢

花の[illegible]狩きる弦度の住所
蝶[illegible]へとてう所の淵迄
陽出の移うつるほど紀離の変
化恍[illegible]なれいまの[illegible]
潜いこぬい住よりふ[illegible]懐を
[illegible]を眉世[illegible]むと入[illegible]ふし
うき[illegible]と対[illegible]の勢に交れて
ふくし心を追下を混
麻[illegible]ら何やら淋し[illegible]れ方
紀系の独[illegible]法[illegible]稲[illegible]
馬場[illegible]の木[illegible]あれ[illegible]
後皮を積[illegible]へ私[illegible]
朝[illegible]紀貫之[illegible]
類一行り朽[illegible]

下ノ巻六

当[illegible]の[illegible]
屋の[illegible]後い[illegible]紙をかな[illegible]
[illegible]の弱おのれ[illegible]
吹雪の袖をふる[illegible]
[illegible]の冥加を買人々の[illegible]
暦巻たるあうつきれ　霜